人見知りする碧（暫定）

くぃかそ　南晶　EARTH　白かぼちゃ　うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人見知りする碧（暫定）

【Ｎコード】
Ｎ６２３５Ｗ

【作者名】
くぃかそ　南晶　ＥＡＲＴＨ　白かぼちゃ　うわの空

【あらすじ】
リレー小説なので、今後定かではありませんが、
人見知りする私と、記憶喪失な少年を取り巻く、
村人たちのお話です
現在、少年の過去が明らかに！？
少年の故郷では何が待ち受けているのか！（１２話現在）

人見知りする碧（前書き）

リレー小説です
第一走者は不詳この私、霧桐くぃかそが務めます！
おぼつかない、生まれたてのバンビ走法ですが、
頑張って最後まで走ります！

人見知りする碧

海辺の村といえば漁村だと思っている人はいないだろうか。
いや、おそらく大体においてそれは正しいのだろうが、とにかくこの村は違った。
海に面してはいるものの、漁業より温泉が主体の観光業が盛んで、漁業で生計を立てている者は少なく、市場などには卸されない。全て近隣の宿や料亭へ直入荷される。
また、ほとんどの人間が旅館や料亭に勤めているため、数多くの女性が和服でうろつく、一風変わった町でもあり、少なからず有名なのだそうだ。
が、所詮少なからずであり、そんなに流行っている訳ではなく、せいぜい数年に一回、マイナーな観光誌に小さく紹介されるのがやっとの田舎村だった。

そんな村にある唯一の砂浜を、一人の少年が歩いていた。
少し茶色い髪は、かなり適当にカットされていて、頭のあちこちから四方八方にはねている。
セットのように見えなくも無いが、おそらく物臭なだけなのだろう。
服装も、シャツの上に黄色いパーカーを羽織り、若干色あせたジーンズにスニーカーというシンプルなもので、お洒落に気を使うようには見えない、しかし不思議と野暮ったい印象も受けなかった。
波がかからない十分離れた所を、少年の足跡が点々と続いている。
私はゆっくりのんびり歩く少年の隣を、砂浜に足跡を残さないように遊んで歩いていた。

少年はしばらく砂浜を歩くと、メガネを取り出してかけ、

「行こっか」

と、私を見下ろしていった。

少年は少し、いやかなり変わった上に面倒な身の上だ。

少年には自分の記憶がない。

記憶喪失の一種といえばそうなのだろうが、
忘れているというより進行形で覚えられない、といったほうが正しい。
それも自分に関するものだけ。
そのほかの記憶力は健在で、日本の総理大臣を伊藤博文から
当代まで歴代全て暗唱できる程だ。
しかし自分の事になると、名前も住所も何もかも、
日にちを跨ぐだけで分からなくなってしまう。
さらに、『自分に関する事』という境界もあやふやで、
自分の言ったことは毎日忘れるのに、自分が言われたことは覚えている。
ここに来た当初、自分の名前が覚えられないなら
毎日勝手に新しく名乗ればいい、という村人のいい加減な助言を聞き入れ、

以来毎朝この砂浜に自分の名前を考えに来るのが、少年の日課だった。

「今日はなんと名乗ることにしたんだ？」

砂浜から堤防を超えたところで、少年に尋ねる。

「うん、レイと名乗ることにした」

「由来は？」

「おばさんが今朝、塩をきらしててね」

「なるほど、零（ゼロ）と書くのか」

言い当てられて少年、レイは嬉しそうに笑った。

今日はまだマシな由来だ。レイの名乗りはいつもかなり適当で、
よく晴れていれば「晴汰（せいた）」、
雨が降っていれば「卓水（たくみ）」、
今朝飲んだ牛乳がうまければ「白水（しらみな）」、など、
かなり適当に決めている。

しかも、由来へ適当なのにやたらと難しい名前になることがあり、
一度味噌汁が美味くて「駿豆（すずお）男と名乗ったとき、
村人は誰もなんと言う字を書くのか分からなかった。

だから今日の名乗りは比較的分かりやすく、いい名前の部類に入る。

レイは毎朝私と砂浜を散歩しながら、二、三十分ほどかけて今日の名乗りを決める。

適当なくせに何をそんなに悩むのかと一度尋ねたことがあるが、

「人間っぽい名前にするのに苦労している」
と言われて閉口した。
　そんなレイの名乗りを、村の皆もレイ自身も楽しんでいて、
レイにその日初めて顔を合わせれば、
「少年、今日は何て名乗りだ？」
とたずねるのが村人の恒例の挨拶のようになっている。

　歩きながらレイに毎朝恒例の質問そのニをぶつける。
「今日はどこのバイトなんだ？」
「ああ、今日は図書館のバイト」
　レイは幾つかバイトを掛け持ちしている。
　しかし、レイはこの村唯一の農家の夫婦にお世話になっていて、
衣食住の大半はそこでお世話になっている。
だからさしてお金に困窮している訳ではなく、
お金の使い所の難しいこの田舎で、特にお金を稼ぐ必要はないのだが、
働いたほうが退屈しなくていいという本人の要望と、
色々な刺激があったほうが記憶にいい影響があるだろうという医者の助言により、
幾つかのバイトを掛け持ちしている。
　しかし、レイはこの村一週間のほとんどが仕事で、
その日のレイの名乗りとバイト先を訊くのが私の日課だ。
「今日も来る？」

「もちろん」

レイの職場について行くのも、私の日課だ。……まぁ手伝ったりはしないが。

図書館はレイのバイト先で一番多いところだ。

「私立潮騒図書館」、これをしきるのは、中村美鈴という娘で、歳は二十代後半にさしかかる。まぁ妙齢といえばそうなるのだろうか……ギリギリだが。

中村美鈴は館長の孫娘で、図書館を切り盛りするレイの直属の上司だ。

館長は還暦がとうの昔に過ぎ去った老爺で、なかなか図書館にこられないため、基本の管理と運営はその孫娘、中村美鈴が行っている。肩書きは司書長だが、実質あの図書館のトップだ。

レイと私は、堤防沿いの道を歩きながら、雑談を交わしていた。少しずつ高くなってくる日が、十月とはいえ汗ばむ程には暑かった。

道中出会う数人の村人は、笑顔でレイの名前を聞いていき、一様に、

「今日はマズマズだな」

というような意味の台詞を残して去っていく。

村人は私と違い難しい名前のほうが好きらしい。

朝の散歩を終えてから三十分ほど歩くと、ようやく図書館に着いた。

離れていた訳ではなく、私たちがダラダラ歩いていたからだが。

図書館はこの浜から少し歩いた場所にある、この村でも大きい部類に入る建物だ。

外見はレンガ造りの洋館だが、内装はいたって普通の図書館だ。

扉も木製の観音開き扉と、ガラス製の自動ドアの二つがついていて、
バリアフリーなのかバリアフルなのかよく分からない構造だ。
しかし名前だけかというと、そうではない。
２階建ての建物内はスロープや手すりが沢山設置されていて、
その辺の公立図書館にも劣らない。事実老人の利用者も少なからずいるそうだ。
海に近いため、微かに聞こえる潮騒が、完全な無音よりも厳粛な、それでいて海沿いの者には馴染み深い静かな空気を生み出していた。
レイは正面玄関をくぐらず、裏手に回って職員専用入り口から入った。
扉を入ってすぐの所にある更衣室に入った途端、

「おっそい！」

元気の良い叱責がとんでくる。

「遅いって、まだ開館の三十分以上前じゃないですか」

レイが口を尖らせて抗議するが、

「うるさい！　前回来た時、一時間前には来いって言ったでしょうーが！」

と、取り付く島も無い。

今レイを叱り飛ばしているのが、中村美鈴だ。
言動から分かるようにかなり活発な女(ひと)で、
背が高く、百七十あるレイよりも拳一つ分高い。

髪は黒のショートで、肩に乗るか乗らないかの長さだ。
仕事は図書館の屋内作業なのに、肌は健康的に日焼けしているから謎だ。
服装はタンクトップの上から軽くシャツを羽織り、
さらにその上から黒いエプロンを着けている今日の格好が多い。
最後には「早く着替えろ！」とレイを一蹴し、
エプロンを投げつけると、レイの足元にうずくまる私を見下ろした。

「あら、こんにちは。今日も着いて来たのね。大人しくしてるんだよ」

そう言って微笑み、ズボンのポケットから煮干しを差し出した。

「に、にゃあ」

ぎこちなく鳴くだけで受け取らない私を見つめてレイは苦笑する。

「美鈴さん、そいつ人見知りするからあんまり食べないよ」

「ふ～ん」

中村美鈴は憮然とした表情で床に数匹煮干しを撒く様に置く。
それでも私が上目使いでなかなか近づかないので、

「今時珍しい慎ましやかな猫だねぇ」

と、くるりと背中を向けた。

「そういえば、今日はなんて名乗るんだい？」

「レイです、今朝塩をきらしていて」

「ああ、平凡な名付けだこった」

それだけ言うと、早く来るんだよと背中越しの台詞を残して、
中村美鈴は更衣室から出て行った。

「おーい」

レイに聞こえる程度に声を絞って、控えめに助けを求めると、
エプロンをつけたレイが屈んで顔を近づけてきた。

「君も難儀なものだねぇ」

笑いながら床に散らばった煮干しを拾っていき、一つを口に放りこんだ。

そう、お察しの通り私は猫だ。
名前はまだ……いや、もう無い。
どこで生まれたのか見当も付かないが、
一番古い記憶では人間はまだ袴を穿いていたように思う。
外見のことはよく分からないが、
黒い毛並みとエメラルドグリーンに光る眼が綺麗なのだとレイが言っていた。
私は猫には珍しく、話せるし、人間と同じものが食べられる。
文字も読める。もちろん猫の言葉も分かる。
だから私にとって、煮干しというのは単に食べにくい硬く乾いた

小魚であり、
単体で何匹も食べたいものではない。あと、個猫的に味が好きではない。
「その人見知りだけでも治れば暮らし易いんだろうけどねぇ」
レイは私の頭を数回撫でると、私を連れて更衣室を後にした……
……

人見知りする碧（後書き）

へったくそな文章、
ありふれた設定を詰め込みまくったキャラたち、
全部で百文字と少ししかない状況描写、
リレーする気あるのかという感じですが、
平に謝りますので勘弁してください……

次の人は南　晶様です！
頑張って～（&どうにかして～）

記憶の欠片

色を変え始めた銀杏の木漏れ日を受けて、館内は穏やか、且つ、爽やかな雰囲気だ。

レイはいつも通り、返却ポストに昨晩のうちに放り込まれた本を台車に積んで館内に搬入した。
一冊、一冊、バーコードをチェックした後、それらの在るべき場所に戻していく。
これが終了するのにおよそ一時間。
レイが猫の手も借りたそうなら、私も手伝いたいものだが、どう見ても平日の図書館に客は少なめで、私の出番はないものと判断した。

「お前も人なら手伝ってもらうんだけどね。」

脚立の上でレイは厚ぼったい本を肩に担いで、私に向ってウィンクする。

「しょうがないね。私は猫だもの。」

お返しに私は自慢の長い尻尾をパタパタ振ってみせる。
古今東西、猫は人の役に立たないようになっているんだ。
私はこれこそが、人との対等な関係を保つ猫の美学だと自負している。
役に立ったら、犬と変らないだろう？

いつもと変わらない今日。
昨日と違うのは彼の名前だけ。

この少年が今までどこにいたのか、ここに来るまでは何をしていたのか、人は知りたがるだろう。
でも、猫の私には、今日という現実があればそれで良かった。
昨日までの事を順次忘れてくれる彼のお陰で、私も辛い記憶を蒸し返す必要がないのだから。

きっとレイもそうなんだろう。
覚えられないんじゃない。
彼は無意識に忘れようとしてるんだって、私には分かっていた。

「レーイ！ちょーっといいかな。」

返却本の台車がほぼ空になった頃、美鈴サンの大声が響いた。
館内にいた僅かな客達は、一瞬、本を読む視線を大声の主に向けたが、いつものことなので何事もなかったかのように、再び自分の世界に戻っていく。

レイは首を傾げて、本棚の上に丸くなってた私を見てから、脚立から飛び降りた。
私も慌てて宙返りを打ちながら、床に着地する。

カウンターの前のコンピューターに向って、大声の主、美鈴さんがガタガタとキーボードを叩いていた。
自分の目の前に立ったレイをチラリと上目遣いで見て、プリンターから出てきた出来立てのリストをバっと掴むと、彼の前に差し出した。

内容までは把握しかねたけど、ずらりと並んだ漢字の羅列はどうやら人の名前らしい。
レイはリストを手に取って目を走らせると、フムフムと頷く。

「これが何だか分かるわね？」
「・・・憶測ですけど、返却期限過ぎても返してくれない人のリスト？」
美鈴さんは、胸を反らして鼻息荒く言った。
「まさにその通り！これは今だに本を返さない罪人どものリストなのよ。何冊もキープしたまま、1年も返さない輩もいるわ。こちらから催促してやらないと、ヤツらは勝手に時効だと思ってしまうの。あたしが言いたい事、分かるわね？」
レイは首をすくめて、茶色の髪を掻いた。
困ったときのレイのクセだ。
「・・・憶測ですけど、この人たちに電話しろってことですか？」
「ご名答！知らない人に電話するのは、いい社会勉強になるわ。最近は電話で敬語も話せない人間も多いんだから。つまり、これはあなたの為よ。」
おいおい・・・。
私は美鈴さんの強引な理論武装を聞いて、苦笑した。
困った顔で、でも、絶対に嫌とは言わないレイは、神妙な顔で頷いた。
「分かりました。やってみます。できる範囲で・・・・。」
◇◇◇◇
レイはその日、電話が設置されている別室に軟禁状態にされること

になった。

「新しい刺激だな、レイ。」

「・・・どうだろう。例えば、僕が今日電話するだろ？でも、明日以降、その人が返却に来たら僕は電話した事を覚えてないじゃないか。」

「後腐れなくて、いいんじゃないの？」

「自分が電話したのを覚えてない人が、僕を探しに来たら、何だか悪いなあ・・・。」

「後の事は館長の仕事でしょ？」

「まあね。でも、未来形の約束ができないのは、時々不便だな。」

彼の賢そうな茶色の瞳が少し曇った。

呑気な彼にも、葛藤はある。

その気持ちは分かったので、私も一応猫らしく、彼の腕に体を擦り付ける。

この慰め行為が、古今東西、人間達のハートを鷲掴みにしてきた事は立証されているのだ。

例外なくレイも微笑んで、私の小さな頭をクシャクシャ撫でた。

「気にするなよ、レイ。さ、ちゃっちゃと済ませよう。」

「了解。」

リストのトップバッターは、一番古い延滞者で、１年前に借りたままになっていた。

貸し出し日時は、奇しくも一年前の今日、１０月１０日だ。

「香坂沙耶歌（こうさかさやか）さんかあ・・・。あれ、どっかで聞いたような・・・」

リストを見ながら呟いたレイの言葉に、私はギョっとして耳を立て

た。

彼が人に関して覚えていることなど、珍しい事だったから・・・。

記憶の欠片（後書き）

2番手、南　晶でした。

次は白かぼちゃ様です。

宜しくお願いします。

変な友人

香坂沙耶歌。

彼女はこんな田舎村では相当目立つ変人であり、私が普通の猫でないことを知っている数少ない友人でもある。

私としては遭う度に追い掛け回されるので忘れられない存在ではあるのだが、レイも覚えているということはもしかして彼もなにか被害にあったのだろうか？

レイはしばらく考えていたが思い出せなかったようで首を傾げながら電話に手をかけた。

「もしもし、私は潮騒図書館のレイと申します。図書の返却についてお話があるのですが沙耶歌さんはご在宅でしょうか？」

しっかり言えてはいるのだが、どことなくぎこちない印象を与えるレイの敬語。喋りにくいなら喋らなければいいと思うのだがそうもいかないのが人間なのだろう。猫でよかったと思える瞬間だ。

「沙耶歌さんですか？　潮騒図書館のレイと申します。図書の返却期限が過ぎていますので返却をお願いします」

なにやら会話を続けているとレイが困ったような顔になる。

「はい、ではしばらくしたら伺わせていただくのでよろしくお願いします」

レイは頭を下げて受話器を下ろすとため息をついた。

「どうかした？」

「なんか返すから取りに来て欲しいんだって。電話かけ終ったら行ってくるよ」

◆

私たちの眼前にそびえ立つ立派な門構え。電話をかけ終わったレイが美鈴さんの許可を得てやってきたのは、この村でも一、二を争う旅館だった。

彼女と遭遇するのはいつも外だったので知らなかったがまさかこんな家に住んでいたとは。まぁあの変人がごく普通の家に住んでいても驚くのだけど。

さすがに表から入っていくわけにもいかず裏に回り住居部のチャイムを鳴らす。

しばらくすると家の中からバタバタという足音が聞こえてきた。

「やあやあ少年久しぶり。おお、猫ちゃんもいるではないか」

「ああ、沙耶歌ってクロさんのことだったのか」

勢いよく扉を開け出てきた彼女がクロさんこと沙耶歌である。

背中に届く長い黒髪にスラリとした身体つき。黙っていればおそらく美人といわれる人間なのだろう。黙っていれば。

ちなみにクロさんというのはレイの名前について聞いた彼女が自分の髪を指し、「ならば私のことはクロと呼んでくれ」と言ったた

めついた名前だ。
一応本名も聞いてはいたのだが、それからずっとクロさんと呼んでいたのでレイも彼女の本名は忘れていたのだろう。たしかに考えてみればこんな濃い人物はレイでも覚えていて当然かもしれない。
「でもクロさんなんであんな丁寧な喋り方をしてたのさ。普通に喋ってくれてれば電話のときに分かったのに」
「少年が分かってなさそうだったから、からかってやろうと思ってな」
「だから取りに来てって言ったの？」
「もちろんだ」
なんとも迷惑なことを堂々と言う彼女だがこれで平常運転なのだからどうしようもない。
「猫ちゃんも久しぶり。いいネギを取り寄せたんだが一本どうだい？」
「断固として遠慮する」
いい笑顔で言ってくる彼女の言葉を即座に切り捨てる。
彼女は私が人間と同じ食事を取れると知ったときから普通の猫が食べられないものをちょくちょく勧めてくるのだ。
ネギ入り料理は食べてあげたのだが彼女としてはそのままで食べてほしいらしく納得しない。生ネギの味、苦手なのに。
「やれやれ手厳しいな。生で食べても甘いと評判のネギだぞ？」

「はいはいそこまで。そんなこと言ってないでクロさん本返してよ」

途端、饒舌だった彼女の口が止まり目が泳ぎ出す。

「それなんだが……。すまんな、まだ見つかっていないのだ」

なんでも電話を受けて探し始めたのだが見つからなかったらしい。見つける前に来てくれと言ったことより、見つからなくてすまなさそうにしていることにびっくりだと言ったら失礼だろうか。

「本当に申し訳なく思っている。お詫びにと言ってはなんだがこれを納めてほしい」

「名前リスト？」

「名前を付けるのが大変だと聞いていたからな。私がいいと思った名前を書きとめておいたのだ」

彼女にしてはなんとも気が利いている。私も内容が気になったので、レイにしゃがんでもらい一緒に見てみた。

なになに、『暴威（ボーイ）』、『主人公（ヒーロー）』……っと。

「これ破ったら？」

「そうだね」

レイの手によって丁寧にバラされていく名前リスト。

「ひ、ひどい！」

「ここにある名前の方がひどいと思うよ」

「猫の視点からも同意」

「私のセンスに時代が追いついていないのか……」

私は長いこと生きてきたから世の中何が起こるかわからないことを知っている。でもそんな時代は来ないと断言しよう。

「まぁいいや。バイト中だしもう僕は戻るからまた自分で返しに来てね」

「今日はすまなかったな」

彼女はすまなさそうに頭を下げて謝った。普段はふざけていても謝るべきところはしっかり謝る。そういったことができるから代名詞が変人でありながらも評判は地に落ちていないのだろう。

そんな彼女にレイが手を、私が尻尾を振って図書館に戻った。

バイトの息抜きにはなったのかな？

変な友人（後書き）

三番手、白かぼちゃでした。
リレー小説なんだしこんなイロモノな回があってもいいよ……ね？
ではＥＡＲＴＨ様よろしくお願いします。

不機嫌に

「はぁ～次は大道(だいどう)…叶冶(きょうや)？」

レイは例のリストを睨めつけながら言った。
あれからまた私達は電話の置いてある別室に閉じ込められている。
暇をもて余した私は忙しそうなレイを観ながら、丸くなっていた。

「また珍しい名前だな」
「うん…叶うに治めるだって、読み方に自信がない」
「お前も似たような物じゃないか」
「心外だよ、そんなつもりはないって」
「しかも毎日名前が変わるし」
「…さ！はりきって電話するぞ！」
「…」

私は呆れて漏れそうになった溜め息を欠伸にかえて、伸びをした。
ま、人は自分の事は不思議なほどにわかっていないものである。
しかしその、私の経験上、人には種類というものがあって、他人に言われてそれを気づけるものと、気づかない、むしろ意地になるものがいる。
…あえてレイがどっちとは言わないが…。

今度こそ溜息をついた。

とても心地いい室温についつい眠くなってきてしまう。
今日はもうここで眠ってしまおうか…。
いや、レイの仕事に付き合ってやろうか…。

ぼうっと瞬きを忘れていると近くの物が霞み、遠くのある一点にピントが合う。
目が次第に痛くなってきて瞬きをしていない事に気がつく。
あわてて目を閉じると世界が元に戻った。
「もしもし…はい、潮騒図書館です。本日は図書の返却に…はい、はい？」
結局決めかねて、なにをするでもなくレイを見ていると顔がどんどん険しくなってきた。
いじくっていた茶色の髪を離して頭を掻く。
どうしたんだろうか、もしや…
「…ですから、それは先程も申し上げました通り…え？いや私ですか？…はい、レイと言いま…いや、ですから…はい、わかりました。すぐに伺います」
ガチャっと不機嫌そうに受話器を置く音がしたので、ちらりとレイを見ると、出かける準備をしていた。
「どこへ行くんだ？」
「お客のとこ…本は無くしたから返してほしかったら一緒に探せって」
予想は当たった。
まあ、返却期限を守らないやつで、しかもリスト入りするヤツときたら、それはもう図書を無くしているヤツとか、単なる面倒くさがり屋なヤツとかしかないのだ。
そいつらにいきなり電話して「貸した図書を返せ」といっても、そ

う簡単に返すわけがない。
なにしろ一年近く“忘れていた”わけだから。

「脅迫めいてるな」
「うん、しかもかなり上から目線、『探せ』だよ『探せ』」

こりゃ、ご立腹だ。

「眉間にシワがよってるぞ」
「いいもん、別に」

本当、かなり気が立っているんだろう。いったいどんな相手だったんだ。
ドスドスと足音を立てながら部屋を歩き回っているレイを眺めて、また一つ欠伸。

少し会話の間が開いて、レイが私の前に立った。

のんびり上をむくと、珍しく、レイのイライラして歪んだ顔が視界に映った。

「で、行くのか」
「うん、しつこかったからもう行くって言っちゃったし」
「そうか、お前は大変だな」
「『は』って、何のんきなこと言ってるんだよ、お前も行くんだよ！」

私はげんなりした。
探し物をするのは面倒くさい…。
しかも、なにやら気難しい強敵が相手と見た。

「ほら！美鈴さんに外出許可、もらいに行くぞ！」
「…私は人見知りだぞ！」
「…自分で言うなよ！」

そうだ、いやだ。
下手すれば何時間、最悪見つからなければ見つかるまで、通わなければならない。
知らない、しかも気難しい人間。絶対行きたくない。

そうっと逃げようとすると不意にふわっとした地に足がついていない感覚が体をめぐった。
一瞬遅れて抱き上げられたと気づく。
ジタバタしてもびくともしないレイの腕。
こういう時、猫って不便だと思う。

「逃げるなよ」
「…」
「おまえ毛がふわふわだよなぁ～うらやましい…」

真っ黒な体に鼻を押し付けられ、ぐりぐりされる。
むう。

「じゃあそのふわふわに免じて今回はお留守番ということで…」
「それとこれとは別ね」

レイは即答。

ちっ、

心の中で舌打ちが聞こえた。

不機嫌に（後書き）

ああああああああ！
ごめんなさい！！！
いろいろごめんなさいいいいい！

つぎはうわの空様です！

ゴリラ

「レイ、あんたもモテモテねえ。またご指名ってわけ？」

カウンターで頬杖をついて笑う美鈴さんに、レイはため息をついた。

「そういうわけじゃないんです」

「分かってるわよ。失くしたとか取りに来いとか言われるのは、こっちだって予想してたもの。だ・か・ら！　あんたにこの仕事を任せたのよ」

にやりと意地悪く笑う美鈴さんを見て、レイはまたため息をついた。つまり、面倒な仕事を彼女はレイに丸投げしたということらしい。……予想はしていたが。

「はいはい、気をつけてさっさと行ってらっしゃーい！！」

どん、とレイの背中を押した美鈴さんは、最後までにやついていた。

「……そしてお前は、いつまで私を抱きかかえているつもりだ」

猫なりにむすっとした顔で、私はレイに話しかける。しかし、地図を見ながら歩いているレイは、私の顔など見ていない。大道叶冶

の家は海に近いらしく、レイは今朝歩いた堤防沿いを、図書館に背を向ける形で歩いていた。

「だって、ちゃんと抱っこしてあげてないと、お前は逃げちゃうだろ？」

「子供扱いするな。私がお前の何倍の年月を生きてきたと思っている？」

「別に子供扱いしてないよ。猫扱いしてるだけ」

私はただの猫ではないが、猫である。この微妙な矛盾のせいで、私は反論もできずに黙りこんでしまった。

見知らぬ人間のもとへ出向くのが嫌で仕方がない。それならまだ、生ネギを食べる方がマシだ。……いや、五分五分くらいか。

結局レイも、不安なのだろう。彼は人見知りではないが、記憶を保持できない不安定な存在なのだ。

――毎日毎日、自分のことだけを忘れてしまうというのは、人間にとってどれだけ恐ろしいことなのだろうか。

「……お前はふわふわだけど、やっぱりちょっと暑いなあ。冬だったら、あったかくて気持ちいいんだろうけど。そうだ、冬は同じ布団で寝ようか。きっと、あったかいだろうなー。ふわふわだね、ふわふわ」

切ない思考を吹き飛ばす、間抜けでのんきなレイの声に、私は心

底落胆した。

小さく古めかしい家を見て、「ここだね」とレイは言った。香坂紗耶歌の家とは正反対の、質素な造り……というのは、まだいい言い方だ。古くて小さくてボロボロで、いまにも崩壊しそうな木造住宅というのが正直な感想だった。戸口に、かまぼこの板で作ったのであろう表札が貼り付けられている。油性マジックで「大道」と書いているだけのそれは、インクが滲(にじ)んでいてほとんど読みとれなかった。

「こいつ、絶対変わってるぞ……。絶対変な人間だぞ……！」

かまぼこの板を見ながらジタバタする私をレイはギュッと抱きしめて、インターホンを押した。しかし、インターホンが壊れているのか、いくら押しても音が鳴らない。仕方がないなと呟くと、レイは木製の扉を叩いた。

「すみません。潮騒図書館から参りました、レイです。大道さん、いらっしゃいますか？」

レイが扉に向けて声をかけると、くぐもった男の声で、

「ああん！？　何様だって？　俺様はいらっしゃるけど、あんたが何様なのかが分かんねえ。だから、扉を開けてやるわけにはいかねえな！」

という返事が返ってきた。明らかに日本語がおかしい。「絶対変

な奴だ……！　帰る！　私は帰る！！」と足をバタバタさせてみたが、レイは放してくれなかった。
レイは大きく息を吸い込むと、扉に向かって怒鳴るように叫んだ。
「先ほどお電話させて頂きました！　潮騒図書館のレイです！！」
「……ああ。なんだ、本当に来たのか。面倒な奴」
面倒なのはお前だろうと思った矢先、扉が勢いよく開いた。
中から出てきたのは、がたいの大きな男だった。年齢は……三十歳ほどだろうか。もう十月だというのに、白いタンクトップにベージュの半ズボンという寒々しい格好をしている。あちこちに向かってはねている硬そうな黒髪は、まるでウニのようだった。しかし、顔はゴリラそのものである。
思いっきり不機嫌なゴリラ顔で出てきたその男は、レイの胸元を見て破顔した。それは間違いなく、……私と目があったせいだ。
「お、おい！　お前、かわいい黒ネコちゃんを連れてるな、おい！！　ほれほれほーれ、こっちにおいでぇ」
猫なで声とともに、ごつごつした大きな手がこちらに伸びてくる。私は爪をたてて、レイの胸にしがみついた。――なんということだろう。
この恐ろしい大男は、大の猫好きらしい。
「まあ上がれよ。もちろん、黒ネコちゃんもな！！」

どすどすと家の奥に進んでいく男を見ながら、私はレイにしか聞こえぬように「帰る、帰る！」と囁いた。しかしレイは、

「お邪魔します！」

と宣言すると、私を抱えたまま、大道の家へと足を踏み入れたのだった。

ゴリラ（後書き）

5番手、うわの空でした。
これにて1週目は終了、次回から2週目に入ります。
それでは、くぃかそ様！　お願いします！！

逃走と追走（前書き）

くいかその意地を見せる即興投稿、
とくとご覧あれ！

逃走と追走

部屋の隅に追い詰められ、私はしなやかに、沈めるように四肢を折り曲げた。
猫特有のバネの強い足が、力を限界まで引き出せる位置で固定され、開放のときを待っている。

物の少ないこの部屋では、荷物を崩す、上って時間を稼ぐ、隙間に入って眼をくらます等の「技」が通用しない。
一発勝負の力押ししかないだろう。

「大丈夫だよぉ、怖がらなくても」

大きな影が扉を閉めながら言うと、倒れるように、しかしそっとその場で四つん這いになる。

扉を閉めると流石に薄暗いが、元来猫は夜を駆る者。
この程度の暗さはまったく問題がない。かえってアドバンテージを稼げた。

扉の方も大丈夫だ。閉められるぐらいは予想済み、
幸いこの家のドアノブは全て丸いタイプではなく、
バーを握って傾けるタイプ。しかもあの扉は室内から見て押し戸だ。
まだまだ余裕な状況、しかし油断はしない。

目の前の揺らめく大影は、私の１１時の方向から、ゆっくりと近寄ってくる。
現スピード維持で到着まであと４，６秒。

まだだ、まだ近い。

到着推測時間およそ3，1秒。

部屋の角を背に構える私に、大影――大道叶冶は四つん這いで、
ゆっくりと近づいてくる。

「おいで～、怖くないよ～」

などと、人攫いのような台詞を吐きながら、片手にねこじゃらしを
模したおもちゃを振って、
じりじりと距離を詰める様は、私には最早人ではなく、怪物か妖怪
のそれに見えた。

到着までおよそ2，4秒。今だ！！

「にゃ！」

解き放たれた私の全力の跳躍は、
大男、大道叶冶のはるか後方まで私を飛ばし、
その勢いでドアノブに飛びついて扉を開ける。

「あ！？」

扉を開けた私は、まさしく脱兎のように逃げ出した……。

事の起こりは今から１０分ほど前。
レイと私がこの家に来たときに始まる。
レイに抱えられたまま、怪しく微笑む大道叶冶に危険を感じた私は、
家の玄関扉をくぐると、
「レイ、すまん」
「え？」
レイにだけ聞こえるように事前に謝ると、その場で思いっきり身をよじって暴れだした。
普段は仕舞いっぱなしの爪も今日ばかりは全開だ。
「わわ！」
レイの腕から投げ出された私は、猫特有の平衡感覚で着地、
家の中へ猛ダッシュで駆け込んだ。
私の作戦はこうだ。
1、大道叶冶は私を追うだろうから、
その間にレイが全力で本を捜索する。
2、その間、死ぬ気で逃げ切る。
外に出なかったのは、レイが捕まえるという名目で私を追い回し、
大道叶冶に献上するというシナリオを避けるためだ。
（私がレイに追いかけっこで勝つのはかなり難しい。何故か）

今更だが私は人見知りだ。それも尋常ならざる。

レイ曰く

『恥ずかしがり屋を１０段階評価して、
僕や美鈴さんのような開けっぴろげた人間を１とすると、
君はだいたい３６位だね』

だそうだ。

そんな私にとって、ろくに話せもしない、
「にゃあ」と「にゃん」しか話せない状況で、
いつ見つかるかも分からない、しかも自分のものではない本を探すために、
見ず知らずの大男に撫で回される猫身御供になるのは嫌だ。断じて嫌だ。

考えても見て欲しい。
人見知り指数３６の私が、
見ず知らずの人間にベンチで隣に座られるだけで固まってしまうこの私が、
この状況で逃げずにいられるものか！

レイには悪いが多少状況が悪くなろうが、
ここは全力で逃げさせていただく。命に関わる、死活問題だ。

「にゃにゃにゃにゃ！」

いささか力の抜けるかけ声とともに、玄関先に付いた急な階段を一気に駆け上がる。
この勾配なら人間にはさぞ上りにくいだろう。それだけ時間が稼げる。

階段を上って、とにかく部屋や家具などの配置を頭に叩き込む。
扉の開く方向や、細かな距離なども出来うる限り覚えていく。
決して身を隠す真似はしない。
見つかれば即アウト、賭けにしては分が悪い。

後ろから階段を軋ませながら上ってくる足音が二つ。
左右の扉が大きく開かれた廊下の真ん中で臨戦体勢に入る。
この位置なら最悪、壁を蹴ってフェイントをかければ3つめの部屋にも入れる。

さぁ、地獄の鬼ごっこの始まりだ。

「じゃ、あの猫を捕まえたらちゃんと手伝ってくださいよ」

「おう、任せろ」

「本を一緒に探して、返してくれたら、1時間までなら貸し出しますので」

「おお！」

「じゃ、打ち合わせ通りに。大丈夫、言う通りにすれば5分で捕まりますよ」

などという会話が、実は二人の間で繰り広げられていた事は、その時の私には知る由もなかった……

逃走と追走（後書き）

レイは外道ではありません
悪戯好きで、職務を全うしたいだけの、
ただの面倒臭がり屋なのです

大道叶冶も変態ではありません
ただ見かけによらず動物が大好きな、
しかも言葉が少し幼児退行する、
ただのいい大人です

南様、今回はバトン手渡しです！
（出来てますよね？）

訪問者

さすが崩壊寸前、木造住宅。
ギシッ、ギシッと一歩一歩登ってくるヤツラの足音が耳障りに響く。

「オイデ、オイデ～！」

気色の悪い、低い男性の猫なで声。
私はブルっと背中の毛を逆立てる。
冗談じゃない。
美しい黒猫を抱くのは、古今東西、麗しきマダムと相場が決まってるのだ。
その対極にいるこのゴリラ男に捕まる訳にはいかない。

チャンスは一瞬だ。
階段から男の黒髪がゆっくり上がってくるのが見えた時、私は持てるだけの脚力を駆使して、その頭目掛けて飛びついた。

「うおあああ??」

いきなり自分の頭を踏み台にされて、大道叶治は奇声を上げて階段でよろめいた。
その踏み台のお陰で加速のついた私は、勢いのまま、後続のレイをも飛び越し、一気に玄関まで飛び降りる。

・・・どんなもんだ、愚鈍な人間よ・・・。

得意げに振り返った私は、階段で繰り広げられている信じられない光景に息を呑んだ。

階段の最上段で猫に飛びかかられ、頭を踏み台にされた大道叶冶はバランスを崩し、まるでスローモーションのようにゆっくりと背中から倒れていくところだった。
その後ろにピッタリくっついていたレイは当然、巻き添えを食らい、大男の下敷きになる形で一緒に背中から押し倒される。

猫の動体視力で見たその光景はまさにスローモーションだったが、実際は息を呑む間もなかっただろう。
つまりこの大男はレイを下敷きにしたまま背中から階段にひっくり返って、そのまま二人でもつれ合うように最上段から落下してきたのだ。

ダダダダダ・・・ダダーン！

すさまじい音とともに、呆然と立ち尽くす私の目の前に、二人は絡み合って転がり落ちてきた。

「おい？レイ？それと、あんた・・・、大丈夫か？」

まだもつれ合ったまま動かない二人に、私は恐る恐る問いかける。
しばらくの沈黙の後、大道の体がビクンと動いた。

「・・・ってええ。くっそお、やられたあ・・。あ、おい、あんた大丈夫か？」

頭を抑えながらムクリを起き上がった大道は、顔をしかめて恨み言を吐いたが、すぐに下敷きになって倒れているレイに気が付き、その顔をペシペシ叩いた。
私も慌てて、近寄ってレイの顔をペロペロ舐めた。
レイは目を瞑って眠っているように動かない。

「・・・おい、ヤバイぞ、猫。」
「そっ、そんな・・・！」

大道の言葉に、私は横たわるレイの胸の上に乗って両前足を使ってモミモミした。
多くの猫が持っているこの習性を、私もまた忘れる事ができない。
心臓マッサージとしては威力に欠けるが、癒し効果はテキメンだ。
今、癒しが必要かどうかは別問題として。

必死でモミモミ攻撃を続ける私の背中から、突然、眠っていた筈のレイの両腕が巻きついてきた。
あっと思った瞬間、私はレイの腕の中に捕獲されていた。

「・・・ってえ。ひどいな。手加減してくれよ。」

顔をしかめて、レイは腕の中にいる私にブツブツと恨み言を言う。

よ、よかった。生きてる！

そう思ったのも束の間。
レイの頭上から、ニュっと現われた大道の顔が私に向って微笑んでいるに気が付いて、私は背中の毛を逆立てた。

「よかったな、猫。」

そう言いながらドサクサ紛れに伸びてきた大道の手に、私は渾身のネコパンチをかまして、レイの腕からすり抜ける。
その勢いのまま、私は廊下をダッシュして、突き当たりの部屋に飛び込んだのだった。

ドアノブが回す式でない事を確認しながら・・・。

◇◇◇◇

この１０分後、見事に部屋を飛び出す事に成功した私は、廊下を突き抜け、玄関まで猛ダッシュした。
さすがに玄関のドアは私の猫力で開くようなものではなく、不本意にも私はそこで再び、袋の鼠（猫？）となってしまった。
せめて臨戦態勢は整えておかねばと、玄関のドアを背に私はうずくまって、敵がいる前方を見据える。

だが、人見知りの神様が私に味方した。
ドタドタと廊下をこちらに向ってくる大道とレイの姿が見えた時、私の背中の玄関のドアがガラリと開いた。
ドアが開き放たれた瞬間、爽やかな秋風がサアっと吹き抜け、私の柔らかい猫っ毛をなびかせる。

「・・・何でこんなトコで座り込んでるの？」

聞き覚えのあるその声に、私はびっくりして振り返った。
開け放った玄関に仁王立ちになっている声の主。
それは紛れもなく、図書館の美鈴さんだった。

訪問者（後書き）

2周目、二番手　南でした。

次は白かぼちゃ様です。

宜しくお願いします。

鶴の一声

「美鈴さん！」

彼女の前で喋ることのできない私は心の中で歓声を上げた。美鈴さんがなぜここに来たのかは知らないが、このタイミングで現れた彼女は私にとって救いの女神である。

仁王立ちする足の間を潜り抜け脱兎すら超える速度で外に駆け出した。

「どうしたのかな？」

外に出て室内を警戒している私を美鈴さんが不思議そうに眺めるが、生憎それを居心地悪く感じている余裕はない。

そうこうしているうちにレイと一緒に危険人物がのそり、のそりと玄関の辺りまでやってきた。

「げ、美鈴じゃねえか」

「あれ、美鈴さんじゃないですか」

「レイ、猫ちゃん一体どうし……そういうことか」

美鈴さんは大道の姿を見ると、私の苦労を察してくれたのか首を振りながら大きくため息をついた。

一目で分かってくれるとは美鈴さんもやるものである。今度からは煮干を一つぐらいならば彼女の前で食べてあげてもいいかもしれない。

「大道、あんたその顔で猫に近づいていくのは動物虐待になるから止めろっていったろ？」

「虐待になんてなるか。これは……そう、ちょっと性急過ぎて猫がびっくりしただけだ」

紛れもない虐待であると声を大にして叫びたい。いや、ほんとに。

それにしても今の会話を聞く限りどうやら美鈴さんと大道は知り合い、しかもそれなりに親しい間柄らしい。大道の性格に少々問題はありそうだが、それを除けば二人とも気が強く立派な体格でありなんとなく納得できる組み合わせだった。

「お二人は知り合いなんですか？」

「残念ながら腐れ縁さ。こいつとは同い年で昔から何かと関わりがあってね」

「え、そうなんですか！？　てっきり大道さんは三十歳ぐらいかと……」

心底驚いたというレイに私も心から同意する。私など三十歳、もしくはもう少し上なのかと思っていたぐらいだ。

「何言ってやがる。俺はまだ二十――」

「オホン！」

「――二十代後半だぞ」

特に理由はないが大道をナイス判断と褒めたくなった。
それにしても美鈴さんは喉の調子が悪いようだ。まだまだ若いとはいえ気を遣ってもらいたいものである。

「それにしてもどうして美鈴さんがここに？」

「それが図書館に誰も来なくなったから私もリストを調べてたんだけど、レイがこいつのところに行ってるのが分かってね。貸し出し期間も相当長くなってたし、レイ一人じゃ不安だったから私が直々に着てあげたってわけさ」

おそらくその判断は正解だろう。現に彼らは私を捕まえようと四苦八苦しているが捕まえたところで本が見つかるわけでもなく、そこからさらに本を探すために時間がかかるのだからレイが図書館に帰れるのはいつになるか分かったものではない。
レイもそのことに気が付いたのかばつが悪そうに頬をかいていた。

「そういうわけで大道、本を返しな」

「いやそれがどこにあるのかわからなくてな」

「じゃあ今すぐ探して返しな」

「いやでも結構散らばってて」

「今すぐ探して返しな」

「……おう」

なんと見事な手腕だろうか。
美鈴さんはあれほど混沌としていた状態をあっという間に片付けてしまった。
いっそ清々しいほどに遠慮のないその姿にはもはや威厳すら感じられるほどである。

まったく歯が立たなかった大道は大きな身体でありながら器用にもとぼとぼといった雰囲気を出し、本を探すため家の奥に引っ込んでいった。
それは散々追い回された私でさえ同情してしまいそうな後姿であり、レイはとても我慢できなかったのだろう。大道に気遣うように声をかけた。

「大道さん、僕も手伝いますよ」

「おう、頼む……」

こうして二人は家の奥に向かい、美鈴さんと私はその後姿を見送った。

「さて、私はどうしようかねえ」

玄関にどかりと座り込んだ美鈴さんはこちらを見ながらそう呟いた。明らかに私に構おうとしているようである。
大道の魔の手にかかりそうだった窮地を救ってもらった立場上、本来ならば彼女の意を汲んで相手をするのが仁義というものなのだろう。しかしそうは言っても私はかなりハイレベルの人見知りである。

頭では分かっていてもなかなか美鈴さんのほうへ踏み出すことができないのだ。
その結果こちらを見る美鈴さんとにらみ合うような形になってしまいなんとも居心地が悪い。

ではレイが本を探しているところに行けばいいかというと、それも好ましくない。なぜなら大道も一緒にいるため何が起こるかわからないからだ。
しかしだからといってこの家から離れてぶらぶらするのも失礼な気がする。

結局レイと大道が本を探して戻ってくるまで、こちらをちらちら見る美鈴さんと一定の距離をとりながらうろうろしているというなんとも居心地の悪い時間を過ごしたのだった。

鶴の一声（後書き）

遅れて申し訳ありません。
三番手、白かぼちゃでした。
ではＥＡＲＴＨ様、よろしくお願いします。

崩れ去る穏やか

「…」
「何か言うことは？」
「…ごめんなさい」

気の毒に…
そう思って目の前の光景を眺める。
昔から、女性というものはどこか…肉体的ではなく精神的に強いものがある、と決まっている。

「美鈴さん、そんなに怒らなくても…」

遠慮がちにレイが気の立った美鈴さんをなだめる。

「に、にゃあ」

一部を除く人間の前で喋れないことになっている（はず）自分も小さく同意を示す。
ああ…なぜこんなに女というものは怖いのだろう。
きっと聖徳太子より、卑弥呼のほうが強い。
そんな気がする。

「…ったく、レイもそんなに甘いから一冊の回収にこんなに手間取るのよ！ねぇ？ねぇ？」

…完全に聞いていない。いや、聞こえていない。そして美鈴は誰かにむかって喋り始めた。
一人で勝手にペラペラ喋っていられるのも女の性質だ。

それを見て、大道が足音を忍ばせてそろりと方向転換している。
「あぁ～最あ…ってどこいくのよ！？」
しかしバレる。
「え…あの」
ダラダラと冷や汗をかきながら、できるだけ美鈴さんと目を合わさないようにしている大道。
「もとはといえばあんたのせいでしょ！男なら責任とりなさ…」
さらに運悪く巻き込まれ、隅っこに連れてかれて美鈴さんに睨まれあたふたするはめになっている。
かわいそうに…。
目に涙を浮かべている大道を見ていると、なぁ、と私を呼ぶ声が聞こえた。
音源を探すとレイにあたって止まる視線。
「い…いこっか」
「にゃあ」
助けてやりたいが、そんな手立ても、義理もない。
しかも、これは暴走中の美鈴さんから逃げられるまたとないチャンスだ。
悪いが大道には囮という大切な役をやってもらうことにする。
「ホントありえないんですけど！なんでまた私が…」

「すみません、すみません、すみません、すみません、ずびっ…すみません、すみま…」

噛みながら狂ったように謝る大道、それにあたっている美鈴さん。
そして…

「いまだ」

小声の合図。

一人と一匹は脱兎のごとく走り出した。

――――――

「はぁ、はぁ」
「ハッハッハッハッ」

力強く地面を蹴り上げる後ろ足、意識しないほど一瞬重力に逆らって浮かぶ体、そして前足から地面に着地する。
心臓と、風を切る音、少し前方には少年の背中。

私は人間の歩幅を羨ましく、憎らしく思って急いでいた。
猫は素早いが、長距離には向いていない。

「ふう…」

いきなりレイが立ち止まった。
少し遅れて私も止まる。
今日はたくさん運動している。

「どうした？」
周りに人の気配がないのを確認して口を開く。
するとレイは振り返って、
「美鈴さんは…っと」
とあたりを注意して見回して、溜息をついた。
私が喋るということは人はいないということなのに…

「はぁ…すごかったな…」
「まぁ、女とはああいうものだ」
「そうなんだ…」
走ったせいもあるのか、とてつもなく疲れた気がする。
追手がいない今、一人と一匹は何もせずふらふら歩いた。

「こわかったね」
「ああ」
もうこれからは美鈴さんに逆らったりなど、決してしない。
と、心で誓いながら返答した。

「まだ、いっぱい返却期限過ぎてる人いるよね…」
「毎回こんなのとか、私は嫌だぞ」
「同感」
図書館に帰る足取りが重たい。
まだ沢山仕事が残っている。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、
しかし足は嫌だのリズムに合わせて、一歩一歩勝手に歩く。
…沈黙がさらに気分を落ち込ませる。
なんとかしようと口を開きかけた時だった。

「ぼっちゃん！」

誰かが叫ぶ声がした。
このあたりに人はレイしかいないはず…だ。
でも、ぼっちゃんと言われるほどレイは金持ちでも無い。

「貴方ですよぼっちゃん！無視ですか？」

人を無視するのは一体どこのボンボンだ。
と思い振りむいた。

「ああ、こんにちは猫さん。ぼっちゃん、お友達ですか？」

真後ろには老人が立っていた。

崩れ去る穏やか（後書き）

４番手、ＥＡＲＴＨでした。

うわの空さんへパスです！

一年前のあの日

私よりも少し遅れて振り返ったレイは、そこにいる老人を見て、

「ああ、クロ……えっと、紗耶歌さんのお爺さん」

頭を掻きながらそう言った。私はそれを聞いて眼を見開き、そして警戒した。理由は二つ。まず、この温和そうな老人と私は初対面であったから。それからこの老人が、あの香坂紗耶歌の祖父であるという事実を知ったからだ。

あの香坂紗耶歌の祖父となると、相当の変人である可能性がある。

私は老人の着ているアーガイル柄の薄いセーターを見ながら、この老人とレイはいつ知り合ったのだろうかと考えた。……大方、ネギを持った香坂紗耶歌に私が追いかけまわされていた時だろう。

レイは先ほどの老人の質問を思い出したのか、私の方を見おろして

「友達、ですかね？」

と語尾を上げて答えた。うむ。私とレイは友達かと訊かれれば、友達ではあるが友達ではない。それでは一体なんなのかというと、……私にもよく分からなかった。

曖昧なレイの答えはどうでもよかったらしく、老人はふんわりと笑った。

「ぼっちゃんに会えてよかった。紗耶歌にこれを渡すよう頼まれましてね」

老人は腕にかけていた小さな紙袋をぷらぷらさせてから、レイに渡した。レイは中を覗き込み、それからすぐに顔をあげる。

「これ……」

「紗耶歌が借りっぱなしだった本です。見つかったから持って行ってくれと言われまして」

私は呆れた。先ほどの様子を見る限りどう考えても暇そうだった香坂紗耶香は、面倒な本の返却を老人に任せたらしい。……彼女らしいといえば彼女らしいが。「散歩は健康にいいと紗耶歌に言われましてね」と嬉しそうに笑う老人を見ながら、私は小さくため息をついた。

「借りていた本はそれで全てだと紗耶歌は言っていたんですが……一応確認していただけますか？」

そういえば、彼女が何を借りていたのかまでは把握していない。あの娘は何を借りていたんだろうか。気になった私は、レイに向かって「にゃあ」と鳴いて催促した。それに気付いたレイが、私にも聞こえるように本のタイトルを読みあげる。

「『記憶喪失とは』、『脳と記憶』、『人がなにかを忘れる時』、『記憶のメカニズム』……」

私はそれを聞いて、眉をひそめた。――猫の私に眉はなく、今のはもちろん比喩表現だ。レイも同じように眉をひそめ、それから首を傾げた。それを見ていた老人が、笑う。

「紗耶歌の借りていたその本を見て、私も思い出しました。一年前

の今頃でしょう？　ぼっちゃんが、この村に来たのは」

その言葉を聞いて、私の背中の毛が少しだけ逆立った。

香坂紗耶香の祖父は少しだけ天然で、お喋りではあるものの、まともな人間だといえた。

余談ではあるが、村人のほとんどがレイのことを『その日の名前』で呼ぶのに対して、香坂紗耶歌はいつだって『少年』で通している。それと同じように、この老人はレイのことを『ぼっちゃん』と呼んでいるらしい。

「ぼっちゃんがこの村に来た時、それはもう村中で噂になりましたよ。記憶喪失の人間なんて、そうそう現れるものじゃありませんからね。恥ずかしながらうちの紗耶歌は、ぼっちゃんのサインを貰うのだと色紙まで用意していました。……まあ、ぼっちゃんはご自分の名前をすっかり忘れていたので、サインを貰うことはできなかったわけですが」

普通、記憶喪失の人間にサインを貰おうだなんて思うだろうか。——彼女ならそう思ってもおかしくないな、というのは彼女に対して失礼だろうか。

「それで紗耶歌は、記憶喪失について少しでも詳しく知りたいからと言って、それらの本を借りてきたんです。全てに目を通したのかどうかは分かりませんが、一時期とても熱心に読んでましたよ」

そうですか、と蚊の鳴くような声で返事をしたレイは、おそらく

『その日』のことを、……『その日の自分のこと』を覚えていないのだろう。

「あの日、……この村に来た時、ぼっちゃんはとても辛そうな顔をしていたものですから。できる限り力になりたいのだと紗耶歌は言っていました」

レイが執拗に頭を掻く。その日のことを思い出せず、苛ついているのかもしれない。早く話題を変えてほしいと願う私の気持ちは届かず、老人はのんびりと話を続けた。

「覚えてませんか。あの日のぼっちゃんはまるで世界の終わりのような……いや、世界が終わったような顔をしていましたよ。――そういえばぼっちゃんがこの村に来た時、そちらの猫さんも近くにいたような……。猫さんはどうです？　あの日のこと、覚えてませんか？」

猫さんに訊いてもしょうがないかと笑う老人を見据えて、私は黙り込んだ。

もしも今、目の前に居るのが香坂紗耶歌だったとしても、私はその質問に答えてはいなかっただろう。

この村に辿り着いたあの日のことを。
その前にあった、あの出来事を。

私はレイに、思い出してほしくなかったから。

一年前のあの日（後書き）

５番手、うわの空でした。
折り返し地点なので（？）、少しシリアスな話にしてみました。
それではくぃかそ様、お願いします！

恐怖する黒（前書き）

遅くなったぁ～&間に合った～
期限ギリギリのクセに
品質劣悪ですが、どうぞ！

恐怖する黒

――――人間の記憶は曖昧なものだ。
昨日の事さえ忘れてしまうのに、１０前のことを克明に覚えていたりする。
人間は記憶を取捨選択し、覚えたいこと覚え、忘れたいことを忘れる。
時に改ざんされ、時に添削され、もはや記憶とは過去ではない。
もしかしたら昨日のことだと思っていることも、単なる思い込みなのかも知れない。

いつか、どこかで、私に近しい『誰か』が言った台詞。

私は猫だ、人間とは違う。しかし普通の猫じゃない。
だから、私も同じように記憶を取捨選択をしているのかも知れない。
そうと知らずに。
もしかすると、私の中にある忌まわしい記憶もは、単なる『思い込み』で、
私が記憶している程酷いものではなかったのかも知れない。

朝日を浴びた砂浜にある草のかたまって生えた所で、砂が付かないようにうずくまり、
あやふやな過去を思い出していた。

昨日は老人から受け取った本を図書館へ戻しに行くと、カウンターのところに、

『レイは仕事が遅い！　後は私がやるからこっちよろしく！！』
と張り紙がしてあって、それまでに比べて穏やかに時間が過ぎた。
……美鈴さんが回収リストを紗耶歌の所以外埋めてくるとは予想外だったが。

名前の無い少年が来るのを待ちながら、波音に耳を澄ましていると、
微かに砂を踏む音が聞こえた。
少年が来るには少し早い、そう思って顔を上げると、
そこには和服を着た紗耶歌が立っていた。手に何か小さなものを持っている。
（そしてなぜかブーツを履いている）

「少年はまだか？」

「……どうしてここを？」

「ずいぶん前、少年にここで毎朝名前を考えるんだと聞いてな」
紗耶歌の長い髪が、吹き始めた海風に吹かれて小さく揺れる。

「何故和服なんだ？」

「ああ、今日は実家を手伝うことになっているんだ、どうだ？　似合うか？」

そう言って袖を広げて一回転する。

「いや、ブーツが合わない。草履を履いてくるべきだった」

「仕方ないじゃないか、私はあれで歩くと転んでしまうんだ」

こう見えて彼女は結構ドンくさかったりするのだ。

「それでよく旅館が勤まるな」

「料理は得意なんだ」

そう言って彼女は胸を張ったあと、手に持っていた小さなもの――タッパーを開けて、
屈んで私の鼻先に持ってきた。中には魚の刺身が入っていた。

「今朝獲れたそうだ、美味しそうだろう？」

赤い魚の切り身は、程よく油が乗って光っており、
上に適度に乗ったネギが青く映えていた。
添えられた小さな菊の花と盛られたわさびが、
「ただの魚の切り身」を「一流の料理」へと昇化させていた。

「確かに美味そうだ」

「だろ？」

そういって彼女はタッパーを鼻先から取り上げた。

あれ？　てっきりくれるものかと思っていたが……。
紗耶歌は屈んだまま誇らしげに持っていた小さなチューブから醤油をたらし、
器用にタッパーをひざの上に載せた後、
「いっただきま～す」
と言った瞬間、固まった。
「どうかしたか？」
尋ねると彼女は泣きそうな顔で、
「箸を持ってこなかった」
本気で落ち込んでいた。

結局、刺身は私が貰うことになり、しぶしぶ私の鼻先にタッパーを置くと、
さっとその場で立ち上がった。
「少年には？」
紗耶歌は少し寂しげに笑うと、ゆっくりと首を振っていった。
「いや、いいんだ」
「そうか」

「そうだ、猫ちゃん」
すでに歩き出していた紗耶歌が長い髪をゆらして振り返った。
「なんだ？」
「君は自分を人見知りだと言うけどね、君は人見知りじゃないよ」
「それはどういう」
意味かと問う前に、遮るように彼女の言葉が刺さった。
「人見知りはただの恥かしがり、君は恥かしいんじゃなくて怖いんだろう？
初めて会う人間に害されるのが怖くて、安心できないんだろう？」
思考と体が固まって動かない。
呼吸が苦しく、体中の毛が逆立つ。
耳が大袈裟に心臓の脈動と血流を捉える。
「君の過去に何があったか知らないけど、
少なくともこの村の人間は恐れるほどではないと思うよ」
そう言い残し、彼女は背を向けたまま手を振って去っていった。
怖がっている、恐がっている？　コワガッテイル……
彼女の残した言葉に、私はただ震えて縮こまる事しか出来なかっ

た。

「どうしたの？」

どれくらい経っただろう。
私の横に座ったのは今は名のない少年だった。
相変わらずクシャクシャな髪が風に揺れて海草のようだ。
昨日と同じお気に入りの黄色いパーカーを羽織り、
丸いフレームのメガネが朝日を浴びてキラキラ光っている。

私が答えぬまま少年を見上げていると、少年はにわかに眉をひそめ、

「君……僕の事分かるよね？」

「……にゃ～」

「ごめん、猫違いだったね」

「あ！　こら待て！　私だ私！」

立ち上がってどこかへ行こうとする少年を急いで引き止める。
不安げな声色が面白かったので、少しからかってやろうかと思ったが、
やりすぎたようだ。

「本気でどうか分からないから、その冗談やめて」

「私の毛並みと目で判別ぐらい付かない？」
「判別ついたと確証が持てないから確認したんだ」
「そうか」
「……」
「……」
それきり会話が途切れる。
朝日は淡く、朱より濃く、鴇色よりは明るい、
名付けるなら夜明け色とでもいえばいいのだろうか、
独特の色と明るさで世界を照らし、一日は始まっていく。
「名前はいいのか？」
朝日が水平線からはなれた頃、少年に視線を向けないまま尋ねると、
「もう決めたから」
と、少年は首を振って答えた。
「今日は何？」
恒例の、そして軽く万は訊かれたであろう質問に、少年は初めて言い淀むと、
そっと私から目を逸らし、呟く様に名乗った。

「レイって……名乗ることにした」

驚いた、これまで同じ名前を二日連続で使うことなんて無かったのに。

「……なぜ？」

ワンテンポ遅れて聞くと、少年は――レイははにかんだように笑って、

「僕は記憶がない、零（ゼロ）だから」

これもまた異例だった、彼が自分を題材に名乗ることなど今までに無かったから。

私が何かを言う前に、レイは詰め寄るように私を見つめた。

「ねぇ、君は覚えているんだろう？」

「……何を？」

本当は分かっていた、彼が何を訊きたがっていたのか、
いや、『いつ』の事を訊きたがっていたのか。

「僕がこの村に来た日の事」

即答したレイから顔を背け、私は天を仰いだ。

もう明るくなった空は赤ではなくすでに青く、
レイが来るまでは確かにあった夜気はすでにどこかへ散った後だっ

た。

「――人間の記憶は曖昧なものだ。
昨日の事さえ忘れてしまうのに、１０前のことを克明に覚えていたりする。
人間は記憶を取捨選択し、覚えたいこと覚え、忘れたいことを忘れる。
時に改ざんされ、時に添削され、もはや記憶とは過去ではない。
もしかしたら昨日のことだと思っていることも、単なる思い込みなのかも知れない」

私はそこで言葉を切った。
臆病者の私は、一体何を彼に言ってやれるだろうか。
レイは何も言わずじっと私を見つめたまま耳を傾けている。

見上げたままの姿勢で目を細めると、
視界の端を細く細く、飛行機雲が横切っていった。

言うべきか言わざるべきか……。
朝日はどんどんと昇っていった。

恐怖する黒（後書き）

ちょっと文字数オーバー
どうしてもこれ以上短く出来なかった……
ごめんなさいごめんなさい！！

不吉な存在

言うべきか言わないべきかと言われたら、レイのためには言うべきなのは分かっていた。
いや、寧ろ私には言う義務があり、レイには聞く権利がある。
何故なら、レイが今ここに私といるのは、少なからず私のせいなのだ。
それ故に、私は言い出せなかった。
言ったが為に、レイが私から離れていくのが怖かった。

黙り込んだ私を見つめたまま、レイは朝日を受けて佇んでいた。
私の答えを期待と不安を抱きながら、静かに待っている。
その瞳には強い意志が宿って、どんな事実も受け止めようという覚悟が見えた。

言わなければならないか・・・。

腹を括った私は、丸くなった姿勢からスっと背筋を伸ばして座り直した。
両手を揃えて、長い尻尾をクルリと体に巻きつける。
それに応えるかのように、レイも私の横に腰を下ろした。

「記憶は曖昧なものだ。だから、私が知ってる範囲で話す。それをどう捉えて、どんな決断を下すのかはレイに任せる。たとえ、それが私達の別れになったとしても・・・だ。」

冒頭から脅しを掛けるような私の言葉に、レイは臆することもなくニッコリ笑った。

「分かったよ。いい話ではないんだね。」

そうだ。
いい話ではない。
私は、記憶がだんだんと浮かび上がってくるのを感じて目を閉じた。
まるで、あの日が目の前に襲い掛かってくるように。
ゆっくりと言葉を探しながら、私はとうとう話し始めた。

「レイ、一年前にここに来る前まで、君は、とある村で暮らしていたんだ。山の中の小さな村だ。冬になると雪が積もって外に出て行くのが困難になるくらい北にある村。そして、今だに古い慣習や迷信が残っているような、ね。その村では不吉と呼ばれる迷信が二つあった。何だか分かるかい？」

低い声で呟くように話す私を、彼は食い入るように見つめている。
やがて、彼が唇を噛み締め、目を少し伏せたのを私は見逃さなかった。
この優しい少年には言葉に出すのが辛いだろうと、私は気を利かせて先に言ってやった。

「・・・もう、予想はついただろう？黒猫だよ。私はその村では忌み嫌われる存在だったんだ。だけど、君は私を離さなかった。最後まで匿ってくれた。それこそ盲目的に私を守ってくれた。だが、その為に君は村から追われる羽目になったんだ。」

そこまで言った私は、黙ったままのレイの顔を凝視した。
少しでも、彼にとってマイナスな反応が見えるようなら、今日は切り上げるべきだと思ったからだ。
だが、レイは聡明な茶色の瞳で私を見つめ返して、笑みを見せた。

「僕は君を見捨てなかったんだね。だったらいい話だ。安心したよ。」

彼の言葉に私はたじろいだ。
そう言ってもらえることに期待はしていたが、同時に彼が離れていく不安もあったからだ。
レイが迷うことなく、そう答えてくれたことに私は驚き、そして感動した。
記憶を失くす前から変っていない彼の優しさに、私はまた甘えてしまいそうだった。
今回は情にほだされる訳にはいかないと、私は熱くなってきた目頭を慌てて前足で撫で上げる。
もう一つ、私は彼に告げることがある。
まだ、緊張を解く訳にはいかなかった。

「レイ、何故、私達が友達になったか、君は知らなければならない。それを受け止める方が君にとっては困難かもしれない。知る覚悟はあるかい？」
「・・・知るも何も、事実なんだろ？僕が自分のことを思い出すためには知らなければならないと思う。」
「辛いことでも？」
「うん。だって、僕には辛い過去があっても、この街での現在(いま)があるからね。受け止める事ができると思うんだ。」

穏やかな笑みを浮かべてレイは言った。
その言葉に、変わり者のクロさんや、男らしい美鈴さん、そしていい人なんだけど好みではない、あのゴリラの面々が私の脳裏に浮かんだ。
そうだ。

レイはもう一人じゃない。
あの時とはもう違うんだ。

覚悟を決めて、私は子供に話すようにゆっくりと口を開いた。

「私達が友達になったもう一つの理由は、君自身があの村では不吉な存在だったからだ。私達は忌み嫌われるもの同志、同調しあって一緒にいたんだよ。お互いの傷を舐めあうようにね。何故だか分かるかい？」

穏やかだったレイの顔に緊張が走った。
それに気付かぬ振りをして、私は続ける。

「あの村で不吉と言われたもう一つの迷信、それは双子だ。レイ、君には同じ日に生まれた弟がいるんだ。それ故、君はあの村では忌み嫌われる存在だったんだよ。そして、更に悪いことには、その村には太古の昔から行われてきた慣習があったんだ。私が思うに、記憶がないのはその慣習のせいだ。」

「・・・それ、何？」

レイの顔が恐怖で青褪めてきたのを確認したけど、私は続けるしかなかった。
ここまで話して、止める訳にはいかない。
記憶を取り戻すために、たった一つ残された希望をまだ話していないのだから。

「村では双子が生まれると、先に生まれた方には名前をつけない。出生届を一人分しか出さないからだ。つまり、君には戸籍がないし、はっきり決まった名前は生まれた時からなかったんだ。あの頃から、君は毎朝好きな名前を自分でつけていた。記憶がなくなっても、そ

の習慣だけは残っているのに私は驚いたよ。今、記憶がないのは、名前がなかった為に、常に自分が曖昧な存在だったからだと私は思う・・・。」

レイは話の途中から両手で頭を抱えて、体操座りしている膝の間に顔を埋めた。
これ以上、彼を傷つけたくなかった。
でも、最後にこれだけは言わなければ。
記憶を取り戻す唯一の希望を。

「レイ、君があの村を去ることになる半年くらい前、一人の少女が君に名前をつけた。日替わりだった君の名前が、それから村を出るまでの半年間は定着したんだ。その少女がその名前を再び呼んでくれたら、君の記憶が戻るんじゃないかって、私は思うんだけど。これはロマンチックすぎるかい？」

「でも僕は不吉で、忌み嫌われていたんだろ？その少女って僕の恋人なわけないよね？」

顔を上げたレイの茶色の瞳は潤んでいた。
自嘲的に言った彼に私は思わず体をすり寄せる。

「私が知る限り、彼女は君が好きだった。そして、君もね。彼女は今でもその村で君を待っている筈だ。
レイ、私が今まで黙っていたのは、この海辺の町で君が優しい人達に囲まれて穏やかな生活を手に入れたからだ。忘れたいなら、その方が君の為だと思った。
でももし、君が記憶を取り戻して、自分を確かめたいって言うなら私は止めない。
あの村に戻って、何があったのか思い出す勇気があるのなら、一緒

に行こう。
そこで彼女は君が迎えに来るのを待ってる。
彼女の口から、君は本当の名前で呼んでもらうんだ。」

「・・・自分の名前・・・知りたいよ。記憶も取り戻したい。その少女に会いたいし、僕の双子の弟にも・・・。でも、どうやってその村に行くの・・・？」

レイの瞳に決意の光が見えた。
話したら、こうなることは覚悟の上だった。
でもその時、私には今までとは違うという自信があったのだ。
何故なら、レイはもう一人じゃないんだから。

「村への道は私が案内できる。二人だけの旅は心細いから、君の友人達を道連れにしよう。暇そうなゴリラ男と、いなくてもいいような図書館の館長、家事手伝いの黒髪美人を知ってるんだけど、誘ってみるかい？」

私は悪戯っぽくヒゲを前足で撫で上げた。

不吉な存在（後書き）

すいません。
長くなりました。

次は白かぼちゃ様、宜しくお願いします。

旅の仲間

二人で話し合い、レイの生まれた村にいくと決めてから数時間。ぶらぶらして時間を潰した私達は、美鈴さんを旅の道連れに誘おうと通い慣れた図書館に向かって歩いていた。

ただ普段に比べレイの足取りは格段に重い。まるで今にも止まってしまいそうなものだった。

「ねぇ、やっぱり迷惑じゃないかな」

レイは道すがら何度か繰り返された質問を口にした。

時間を潰している間に聞いたところ、どうやらレイは美鈴さんを誘うことに抵抗があるようだ。なんでも楽しげな旅ならまだしも、かなりの確立で不快な目にあわせてしまうことが分かっている以上、誘うのはどうかということらしい。

「そんなことないさ。それにもし迷惑だったとしても美鈴さんならばっさり断わってくれる」

こう返事はするものの、正直に言ってしまえばレイの気持ちは分からなくもない。むしろ私も人の様子を伺ってしまう傾向が強いだけに共感できると言えるだろう。

しかしそうであったとしても今回ばかりはそれに流されるわけにはいかないのだ。

その理由は目的地にある。古くからの慣習が未だに幅を利かせている村――特にレイの生まれた村では、村人に対し容赦がない。それは慣習があるという理由だけで、何もしていないレイを人間扱い

しないということができる点からも容易に想像がつくだろう。そして残念なことにその容赦のなさは元村人にも向けられるのだ。
では私達はどうするべきかというと、村にとっての異物と一緒に行って干渉され難くすればいい。そう、外の人間という異物と。

無論これは私がかってに思っているだけで、本来ならば余計な心配なのかも知れない上、一緒に連れて行かれる人たちからすればなんとも失礼な話だろう。
だけど私はそうでなければ安心できないのだ。生まれてからレイがどんな扱いを受けてきたか覚えている私は。

「どうしたの？　ボーっとして」

「いや、なんでもない。それよりもレイは美鈴さんへの誘い文句でも考えておいたほうがいい。レイだって本音としては一緒に来てもらいたいんだろう？」

「それはそうだけどさぁ……」

願わくば三人ともついて来てくれますように。隣でぶつぶつ呟きながら歩くレイを見上げ、心の中でそう祈った。

「バイトじゃないのにここ来るなんて珍しいね」

図書館に着いた私達を出迎えたのは失礼ともなんとも言いがたい美鈴さんの言葉だった。

「えっと、少々お願いしたいことがありましてお邪魔しました」

「バイトのシフトを変えて欲しいの？」

「そういうことじゃないんですけど……」

初めはしょうがないなといった顔で見ていた美鈴さんも、レイの普段とは違う態度に違和感を感じたらしい。少し真面目な顔になってレイの言葉を待ち始めた。

「……今度自分の生まれた村に行ってみようかと思うんです。それで、勝手なのは分かってるんですけど、美鈴さんにもついて来て欲しいと思ってお願いに来ました」

それを聞くと美鈴さんはレイを見つめたままじっと黙り込んでしまった。一体何なんだろうという間。

一秒、二秒。

居心地の悪い沈黙が続いたところで美鈴さんが口を開いた。

「そうかい。で、いつ行くんだい？」

「まだ決めてませんけど……。美鈴さん、来てくれるんですか？」

「うちのバイトの一大事だ。雇い主としてしっかり見届けてあげるよ」

「ありがとうございます！」

勢いよく頭を下げたレイを見上げる私は、レイの顔に隠しようのない喜びが現れているのに気がついた。

この村に来るまでは不吉なものとして扱われ、まともに相手をしてくれる人がほとんどいなかったという話を聞いた後だ。たぶんレイは周りの人の優しさを改めてかみ締めているのだろう。
それが友として嬉しく、そして少しだけうらやましくある。

「そうだ、どうせなら大道も連れて行こうじゃないか。車で行くなら運転手になるし、荷物があるなら荷物持ちにできる。少々暑苦しいのが難点だけどね」

カウンターから乗り出した美鈴さんは笑いながらなかなかに酷いことを口走った。
以前会ったときから分かっていたが、やはり大道は美鈴さんにまるで頭が上がらないらしい。表情やしぐさから親しい故の気安さだと容易に分かるものの、さすがにここまでになると大道に同情を禁じえない。合掌。

「それって……いいんですか？」

「なーに、あいつのことだからぐちぐち言ってもちゃんとついて来てくれるさ。それとも君は私と二人の方が良かったのかい？」

「い、いや、そういうわけじゃ……」

分かりやすくからかう様なしぐさをする美鈴さんにレイはまるで対応できていない。
友としてなんとも情けない様子だが、経験値の足りないレイならばまぁ仕方のないことと言えるだろう。
納得いかないこともあるし、少々助け船を出してあげるとするか。

「にゃーお」

「ん？　もしかして猫ちゃんも一緒に行くのかい？」

「そ、そうなんです。美鈴さんたちに断わられても二人では行こうと思ってまして」

「なんだい。なら大道を呼んでも呼ばなくても二人きりにはならなかったんだね」

美鈴さんは面白そうにからからと笑い、レイは助かったとため息を零した。

こんな調子であの少女に会ったときうまく話せるのだろうか？

思わぬ心配事が沸いてきて、私は美鈴さんにばれないようにため息をついた。

旅の仲間（後書き）

なんだかいろいろ申し訳ないです。

次はＥＡＲＴＨ様、よろしくお願いします。

勧誘には人見知りの猫を（前書き）

ＥＡＲＴＨです！

今回は猫好きのあの人を誘いにいきます！

勧誘には人見知りの猫を

「わかった、それじゃあ詳しいことが決まったら教えてくれ」
「はい、ありがとうございます」
「にゃー」

まずは仲間が一人。
気持ちよく引き受けてくれたこの人にレイは、そして私はどれほど感謝しただろうか。

「それであのゴリラは連れていくのかい？もしそうなら私が連絡しておこう」
「ありがとうございます、でも…」

僕達で行きます。そう言った少年はあのころより少し大きくなっていた。

「わかった、それだけ重要なことなんだね？」
「はい、でもその話しはおいおい…」
「ああ、それじゃあ準備しておくから。猫ちゃん、気を付けて」
そうだ。大道は大の猫好きだから…嫌だがそれでも私達を助けてくれることには間違いない。

「に、にゃぁーお」

私の旅までの課題は二人に慣れることだな。
がんばれ。自分

――――――――

「こんにちはー！」

一人と一匹はかまぼこ板の表札があるボ…質素な家のドアを叩いた。
…返事がない。

「こんにちはー！レイです！」

…返事がない。

「こ！ん！に！ち！わぁぁぁ！大道さん！レイです！」

…返事がない。
レイがこっちを向いて自分の髪をくしゃっとした、もしや…

「もう一度やってダメならあの手をつかうぞ」
「い、いやだ…頼む大道出てくれ…」

予感はあたった。
私の小さな訴えをレイは聞くことなく、もちろん大道も聞くことなく少年は腹から叫んだ。

「大道さーん！レイ！レイです！」

返事がない。
仕方がない。

「これっきゃないよ、やっぱ」

レイの視線が黒にぶつかった。

「いけっ！」

私が観念して息を吸うと、あの手発動の合図が丸まった背中を押した。

「に、にゃぁぁぁお！にゃぁぁぁお！」

一心不乱、無我夢中、狂ったような黒猫は、碧を血走らせ木でできた扉に向かっていった。

———カリカリカリカリ…バターン！

「にゃにゃ…にぃゃっつ？！」

———べちっ！

「ねーこーちゃぁぁぁん！」

「よしっ！」

「ふにぎゃぁぁぁー！」

視界のはしにガッツポーズをした少年、続いて猛獣…いやちがう。猛獣のような人間が自分の方へ襲いかかって来ているのが見えた。

「にーげーなーいーでぇー」

「ふにゃゴロ、フニャゴロ、ニャゴゴロ？にゃっ！にゃっ！にゃぁー！」

「あはは、がんばれぇ～」

友よ！そんなこと言ってないで助けてくれ！

「にぃ！」

ぐるりと駆け回って、ピョンとはねあがるとレイの腕に飛び込んだ。

「あっ！」

「大道さん、レイです。こんにちは」

何のことなく私を受けとめたレイの顔はすべて予定どうりだと満足げだった。

なんか、ムカッと心がしたのは気のせいにしておこう。

「なんだ…本は返しただろ？」

対する大道をちらっと見ると明らかに不機嫌な様子だった。

「いえ、今日は折り入ってお願いがあって来ました」

「おねがいぃ？」

「はい」

眉をつり上げる大道…ん？なんだレイ、そんな視線をこっちにやって。

「ほら、秘密兵器」

急かすように耳元で囁かれた。

な、なにをしろと？

「なんだ？だまっちまって」

大道が近づいてくるっ！

「ほ、ほら、今だ！」
「み、みゃー…」

どうすればいいのかわからず、結局半泣き状態で瞳をウルウルさせ、大道を睨み付けた。
しかし、これがよかった。

「おぉ！猫ちゃんが俺をみつめているっ…さぁ！レイ君、猫ちゃん！なにもないけど入ってゆっくりしていってくれ。話を聞こうじゃないか」

ふぅ…ってなにがふぅなのか今一解らないが、今回はレイの作戦勝ちだった。
が、こんなのはこれっきりだぞ！
そう気持ちをこめて見上げるとレイはきれいにありがとう、と笑っただけだった。

「おじゃまします」

空が曇ってきた。
雨が降りそうだ。

勧誘には人見知りの猫を（後書き）

バトンタッチです。

次、うわの空さんお願いします！

虚勢

甘かった、と言わざるを得ない。

私（猫）が絡んでいるならばあっさりと手を貸してくれるだろうと思っていた大道が、レイの話を聞いて難色を示したのだ。

「なんで俺がお前に協力する必要がある？　昨日会ったばっかりの奴に」

部屋の中から音が消え、代わりに、小さな雨音が外から聞こえてきた。

返答に窮したレイは、居心地悪そうに黄色のパーカーを羽織りなおした。私はそんなレイの様子を隣で見ながら、助け船を出すべきかどうかで迷っていた。

例えば私が『ただの猫でないこと』を知ったら、この動物好きは手を貸してくれるかもしれない。そう、私が一言「お願いします」と言えばいいのだ（ちなみに昨日、レイと大道が階段から落下した際、動揺した私が人語を話したことをこのゴリラは忘れているらしい）。

――ただ。

ただ、それだとレイのためにならない。

これから先、彼が体験する苦難はこれ以上のものだ。大道のこの

拒絶なんて、まだかわいい。……レイを人間扱いしてくれているだけ、優しいとも言える。
ここでレイの心が折れてしまうくらいなら、村になど向かうべきではない。

「……お前。他の奴にも声かけてんのかよ？　まさか俺だけってわけじゃないだろ」
腕を組んでこちらを睨んでいる大道に、レイは弱々しい声で答えた。
「――美鈴さんを誘いました。このあと、もう一人誘いたいと思っています」
その言葉を聞いた瞬間、大道が、そして周りの空気が凝り固まるのが分かった。それは、驚愕や恐怖や不安ではない、違う感情のせいで。
「美鈴を誘ったのか、お前」
「はい」
「……分かった。俺も行く」
先ほどまでとは打って変わり、急に大人しくなった大道を見て、私もレイも目を丸くした。……私は、素直に驚いていた。レイには分からないかもしれないが、彼がついていくと言い出したのは、美鈴さんを恐れているからではない。

「どうせ美鈴(あいつ)のことだ。ついていくって言ったんだろ。だったら俺も行く。言っておくが、お前のためじゃない。あいつと、――そこの猫ちゃんのためだ」

私のためだと言ってくれても、残念ながらそこまで嬉しくはなかった。

大道は相変わらず硬そうな黒髪をガジガジと掻きながら、

「あー！！　なんであいつはこう、なんでもかんでも首を突っ込む！！」

「えっと、大道さん……？」

「放っておけねえんだよ、俺。俺は、あいつに借りがある。しかも、返し方がないんだ。だから頭が上がんねえ」

何かのスイッチを入れてしまったらしい。

大道は自ら、そのことを話し始めた。

「昔からそうだったんだ。あいつはなんでもかんでも首を突っ込む。子供のころ、俺ん家(ち)の猫が高い木に登って、降りれなくなった時もそうだった。……俺は怖がりで、猫を助けることもできずに泣いてたんだよ。そしたらあいつ、俺のところに来て『私がつれてきてあげるよ』なんて言ってよ、木に登り始めた。俺はただ、見てることしかできなかった。……あいつが、落ちちまった時も」

レイと私が息を呑んだのに対し、大道は大きく息を吐きだした。
「大怪我ではなかった。ただ、傷が残った。なのにあいつ、『見えない位置だし、死んでないし平気！』で終わらせたんだよ。馬鹿じゃねえか。――いや、馬鹿なのは俺だ」
言葉を吐き出せば吐き出すほど、大道の身体が小さくなっている気がした。

確かに私は、美鈴さんと一緒にいる彼を見た時、違和感を覚えていた。
もしかしたらこの男は、虚勢を張っているだけなのでは、と。
涙を浮かべながら謝り続けるあの姿こそが『本物』で、威張り倒しているあの姿は『嘘』なのではないか、と。
……誰かを守るために、強くなるように。
自分を強く見せるために、ついている嘘。

「――メンバーは、猫ちゃんを除いたら四人か」
回想を終わらせたのか、大道はため息交じりに言った。レイが頷くと、大道は頭を掻きながら、
「それじゃ、俺が車を出す。……美鈴に運転させたら、酷いことになるからな。ああ見えて運転技術は皆無なんだよ、あいつ」

そう言って、力なく笑った。

「美鈴さんと大道さんって、仲がいいんだね」

雨に濡れるとますます貧相に見える大道の家から出たレイは、無邪気な顔でそう言った。……ここまで鈍感だと、かえって清々しい。

「さて、次で最後だな。レイ」

「うん」

傘を持っていなかったレイは、パーカーのフードをすっぽりと被った。パーカーが黄色いせいで、小学生の雨合羽のように見える。

レイはこちらを見下ろすと、ふんわりと笑った。

「濡れるのいやでしょ？　服の中に入れて、抱きかかえてあげようか」

しとしとと降る雨を見ながら、私は首を振る。

「いや、いい。自分で歩く」

「――そう」

少し間をあけてから、一人と一匹は同時に歩き出した。

雨はまだ、やみそうにない。

虚勢（後書き）

……突っ込みどころ満載、うわの空でした。

それではくぃかそ様、お願いします！

決断（前書き）

先に言っておこう
すいませんクロさん
そして、彼女を生んだ白かぼちゃさん……

決断

「レイ、クロの説得は私に任せてもらえないか？」
「でも……」

香坂の旅館の裏口で紗耶歌を呼び出したあと、
私はレイを見上げていった。
雨に濡れたメガネを拭くレイは驚いたように固まる。
何かを言おうと口を開きかけたレイを尻尾だけで制す。

「君の決意は知っている。けど、
彼女は『君が頼みこんだ』という、
ただそれだけでＯＫしてしまうだろう。
それじゃあ彼女の意思を聞いたことにはならない。
それに……」

まだ渋るレイを取って置きの切り札で封じる。

「斉藤夫妻にはちゃんと話しておかないとダメだろ？
あの子供のない夫婦は、なんだかんだで君を本当の息子のように思っているんだから」

「うん、分かってる」

「黙って出て行こうとしてただろ」

レイは茶色の髪を掻きながら、眉を寄せて苦笑した。

「じゃあ、クロさんの説得頼んだよ」

「任せろ」

レイの後姿が小さくなって見えなくなった頃に、
裏口の開く音がして私は振り返った。

「やぁ猫ちゃん、……あれ？　少年はどこだい？
彼に呼ばれていると聞いていたんだが」

「彼は斉藤夫妻と話に行ったさ」

「ああ、なるほどね」

クロは肩をすくめて笑った。

斉藤夫妻はレイが居候をしている、村唯一の農家の夫婦だ。
彼らは悪い人間ではないのだが……少なくとも私は苦手だ。
恐らくレイも、嫌ってはいないにしろ苦手なのだろう、
少なくとも説明に行くのを渋る程度には。

「それで？　君はどうして私に会いに来たんだい？」
「レイは近いうちに、彼の故郷にいるとある人物を訪ねることになった。
それは長い旅になるかもしれないし、レイはこの村にもう帰ってこないかもしれない
そして、何よりその村はレイが行くことを全く快く思わないだろう」

「そうか、それで？　それはいつ発つんだい？
もちろん付いて」

私は首の変わりにゆっくりと尻尾を横に振った。
「私が頼みに来たのは同行じゃない。
どうせ斉藤夫妻に話した時点ですぐに村中に広まるんだ。
そうすれば君が聞き逃すわけがない。
ほっといても出発当日に駆け込み参加するだろ？」
「もちろん！」
実によどみない笑顔で笑う彼女に、軽い目眩を覚えながらも、何とか耐え切る。
頑張るんだ私、まだ言わないといけないことがあるんだ。

「私が頼みたいのは同行じゃない、その先だ」
「その先？」
こくんと、今度は首でうなずく。
「レイは自分の事だけを忘れてしまう。
それが何故なのか私にも分からないけど……
けれどあの村に行って全てを知った時、レイは決断をしなければならない。
そしてその決断をするとき、絶対に彼が決断するのを邪魔しないで欲しい」
「……」

彼女にしては珍しく、紗耶歌は神妙な顔をして聞いている。
――そう、私がレイを追い払った本当の理由はこれだ。
彼女は、美鈴さんや大道の奴とは違って、レイが本当に苦しそうにしているときに、
それを見過ごすことなんて絶対に出来ない人だから。
だから、彼女の説得は私でないと出来ない。

重要な、けれど重たくて潰れてしまいそうな、辛い決断をする時に、

誰かに隣にいてもらって、誰かに支えてもらうのは嬉しいことだ。
誰かに『こうしなさい』と言ってもらうのは、とても楽で幸せなことだ。
けれど、それはあくまで決断ではない、ただ流されただけ。
その後悔は永遠に決断できなかった本人について回るし、
なにより長い目で見て本当には幸せにはならない。
私は、そんなつまらない物をレイに背負って欲しくなかった。
そして、彼女にも『決定的な瞬間を奪ってしまった』という後悔を背負って欲しくなかった。

彼女にも私の言わんとすることが分かっているのだろう。
少しうつむいた顔は浮かない表情で唇をかんだまま止まっている。

「約束できないなら諦めてくれ」

冷たいようだが仕方ない。今もまた『決断の時』なのだから。

「分かった、約束しよう」

重たい表情のまま彼女は顔を上げていった。

「それで？　少年の故郷はどういうところなんだ？」
「山奥の小さな村さ。ここからはまぁ遠いと言っていい所にあるな」
「そうか」

さっきとは打って変わって楽しげな笑みを浮かべる彼女、
いやな予感しかしない。

「あの、何を考えて」
「いや、道中長いなら食料は沢山持って行かないといけないな、と

思って。
　任せてくれ、私はこう見えても料理は得意だ」
「それは聞いた」
私はがっくりと首を落としたまま言った。
「あのな、移動は車だし、食糧なんかは道中で仕入れられるから、いくらでも」
「そうなのか？　なら鍋とかお釜とかがいるか？
　おお、包丁もまな板も――そうだ！　そもそも火がいるな。
　お母さんはまだキャンプコンロ置いているだろうか」
「おーい」
「任せてくれ！　私はこう見えても料理は得意だ！」
「うん、荷物は手で持てる程度にしてくれればいいよ、もう」
もうどうでもよくなった、出発してから怒られてくれ、美鈴さん辺りに。
私の戦いはもう終わった。疲れた。
「そうだ、旅の目的だが」
　和服で腰に手を当て、うんうん頷く彼女に少なくない頭痛を感じながら、
ちょっとだけイタズラしてみる。
「レイは昔の恋人を探しに行くんだ」

「そうなのか！」
どんな反応をするかと思って見ていたが、
彼女は思った以上に普通に喜んでいるだけだ。
手を小さくぱちぱちさせながら飛び跳ねんばかりにテンションをあげている。

「そうかそうか、彼には恋人がいるのか！」
「……意外に喜ぶんだな」
「何を言う、恋人がいるのは素晴らしい事じゃないか！　だって」
彼女は頂きますでもするように両手を合わせ、にっこりと笑って首をかしげ、
まるで自分のことのように嬉しそうに言った。
「少年が帰っていくのを、確実に喜ぶ人間が一人でもいるんだろう？
それはとても素晴らしい事だ。違うかい？」

私は驚いて――どうしようもなく驚いた。

「まったく」
本当に。
本当に変わった女(ひと)だ。

「ふふふふふ」

そんな私を無視して、今度はくるくる回りだす。

「あんな事もしちゃっていたのだろうか？
いや、少年はうぶだからな、――はまだだろう。
――がまだってことはないだろうな。とすると」

「おーい」

「ふふふふふふふふふ」

……レイ、すまない。さっきも言ったが、私はもう疲れたよ。

「じゃあな、私はそろそろ帰るよ。
ああ、今度は忘れたタッパーも持ってくる。それじゃ」

「おお！　ちょっと待ってくれ、少年とその件（くだん）の彼女の事くわしく……」

私は最後まで聞かずにレイの元へ走り出した。

――すまん、レイ。

決断（後書き）

やっちまったw
後悔はするけど反省しないww
――南さん、お願いします

旅立ち

夜のヒンヤリした空気は、秋の終わりを告げているようだ。
澄み切った夜空には、大きな月が輝いている。
満月の月明かりのお陰で、地上は影ができるほどに明るかった。

私はレイより一足早く家から出て、大きく伸びをした。
湿った草の感触が肉球に心地良い。
夜行性の私には絶好のコンディションだ。
だけど、これから先の事を考えると、自然とヒゲが垂れてくる。

役者が揃ったあの日から二日後の今夜、私達はレイの故郷に向かって出発する事になった。
村人が気付かないように、なるべく夜出発した方がいいとの美鈴さんのお言葉によって、深夜１２時出発という殺人的スケジュールになってしまったのだ。
だが、どんなに車を飛ばしてもここから5時間はかかるあの山奥だ。
交通量が少ない夜に出発するのは悪くない考えだと私も同意した。

レイがお世話になっている斉藤家の庭先で、私は美鈴さん達御一行が向かえに来るのを待っていた。
遠くからエンジンの音が微かに響いたのを聞いた時、家の中からバタバタと騒いでいる音がして、私はクルリと振り返る。

「レイ、体に気をつけるんだよ。」
「皆のお役に立てるような立派な人間になって帰ってくるんだよ、いいね。」

「・・・分かった、分かりました。大きくなって帰ってきますよ。」
大きなスポーツバッグを担いだレイの後に、斉藤夫妻が纏わり付くように追い縋っている。
少し迷惑げな顔で苦笑しながら、レイは二人から逃げるように、早足でこっちに向かって来た。
無理もない。
この夫妻は人柄は最高にいいのだけど、どうも思い込みが激し過ぎるのだ。
記憶喪失のレイがフラフラとこの家にやって来た時も、彼らは神が少年に姿を変えて降臨したと信じて疑わなかった。
いや、今でもそう思っているんだろう。
それ故、レイが朝起きると「オハヨウ」の代わりに手を合わせて合掌する。
最初は困惑していたレイだったが、彼らが悪気はないのと、神扱いされる事でこの家に於ける自分の存在意義のようなものと感じて否定するのを止めた。

神か。

息を切らせて、何とか二人のハグから脱出してきたレイを見ながら私は目を細めて苦笑する。
人間に生まれ持った役どころが与えられているとしたら、レイは神だ。
自分の事も覚えていない頼りない神。
ある時はありがたがられ、尊重され、また、ある時は恐れられる。
人は時にひれ伏すのに、時に罪を着せ排斥しようとする。
彼の生まれ持った運命なんだろうか。
あの村にいた時と同じような現象は、どこにいても起るらしい。

「ごめんね、遅くなって。ちょっと説得するのに手間取っちゃった・・・どうしたの？」
私の前までやって来ると、レイは遠い目をしている私の様子に気付いて問いかけた。
私は首を竦めて、尻尾をパタパタ振ってみせる。
「いや、何でもない。ちょっと強引だけど、いい人達だったな。」
「うん。また会いたいよ。帰って来ることができれば。」
『レイ　いってらっしゃい　ＦＩＧＨＴ！』と書かれた横断幕を家の端から端まで広げて張っている夫婦を、私達は感謝の気持ちを持って見つめた。

さっき聞こえた車のエンジンの音はどんどん近付いてきた。
私が視線を向けたのと同時に、黒いワゴン車が急ブレーキをかけて家の前で停まった。
運転席の窓が開き、中から大道の顔が現われる。
ゴリラ顔の分際で、彼は私に気付いてニヤリを笑うと投げキッスを送ってきた。
私は思わず顔をしかめて、それを避けるフリをする。
そうしないと、本当に顔に受けてしまいそうな錯覚を覚えたからだ。
車の助手席から美鈴さん、後ろの席からはクロさんが車のエンジンが切れると同時に飛び出してきた。
車の音に気付いたのか、斉藤夫妻も慌てて門に向かってやってきた。
門の前に並んだ斉藤夫妻、そして私を抱いたレイに向かって、美鈴さんが代表で挨拶した。

「話はレイから聞いたとは思いますが、私達は彼の住んでいた場所に今から出発します。今まで息子のようにかわいがってくれたお二人には不安だと思いますが、私達3人の大人が同行します。安心して待ってて下さい。」

「あんたは図書館の館長だね？」

そう言って、斉藤夫はギロリと睨んだ。

その低い声に美鈴さんは一瞬たじろぐ。

「そうですが、図書館はしばらく閉館という事で・・・」

「いや！あんたなら大丈夫だ。レイを安心して預けられる。」

斉藤婦人がツカツカと美鈴さんの方に歩み寄って、大きな紙袋を手渡した。

「？あの、これは？」

「キビダンゴだよ。これを食べてレイのお供、しっかり努めてくだされよ。」

私とレイはプッと吹き出し、美鈴さんは手に袋を持たされたまま苦笑いした。

犬の勇気を持った美鈴さんに、賢い雉のようなクロさん、そしてゴリラはもう言うまでもない。

万歳三唱して見送る二人を後に、私達を乗せたワゴン車はレイの故郷に向かって走り始めたのだった。

旅立ち（後書き）

南晶でした。

次は白かぼちゃ様、宜しくお願いします。

暗い夜道、車の中

対向車どころか人の気配すらほとんどないような田舎道。
私達を乗せたワゴンはそれをいいことに、警察に見つかれば間違いなく止められるであろう速度で夜道を走っていた。
ライトで照らされる前方から目を逸らせば、明かりは思い出したように点在する街灯とうっすらとした月の光だけ。
私からすれば現実的でない速さで流れてく明かりは、じっと見ていると、『自分は夢の中にいるんじゃないか』『気がついたら慣れ親しんだ寝床で目を覚ますんじゃないか』、そんな気持ちを私に抱かせた。

けれど車内に目を向ければこれが現実だとはっきり分かる。
表情は見えないけれど、こんな個人的なことについて来てくれた美鈴さんと大道の後ろ姿。どことなく楽しそうな様子の沙耶歌。そして私を膝に乗せ撫でてはいるけれど、じっと前を見て口を引き結んでいるレイ。

この帰郷が終わった頃には、きっと私達は何か変わってしまっているのだろう。
正直に言ってしまえば少し、怖い。
過去に目を背けた逃避から始まったものだということは分かっている。それでも楽しかったあの村での生活が、心から楽しそうに笑っているレイが、もう消えてしまうのかも知れないのだ。そこまで考えると、どうしても私の中から怖いという気持ちを消すことはできなかった。

ただ、それでも、私の中にレイを止めるという気持ちは浮かんで

こない。
友が自分の過去を知りたいと決意し、それを言葉にして私に言ったのだ。それだけで私のとる行動は一つ、彼がうまくいくようにすることだけなのだから。

「猫ちゃんがなんだかおとなしいね」

「なんだろ、慣れない車での移動だから元気がないのかな？」

「ふーん。私なんて夜に車旅って時点で楽しくて仕方ないのに」

「よく分かるような、分からないような」

「昼に移動するより不思議と行き先に新しいものが見える気がしない？　それに加えて今回の目的が今まで謎だった少年の過去なんだから楽しくって仕方がないさ」

そう言って笑う彼女は長年生きてきた私から見ても本当に楽しそうだった。
あまりに楽しそうなので思わず私の言ったことを覚えているか不安になったが、目が合うと笑いかけてきたのでおそらく忘れていないのだろう。
そんな彼女を私は本当にすごいと思う。
はじめ話したときはただの変な奴という印象だった。でも話していくうちに優しい変な奴ということがだんだん分かってきた。
私から話を聞いた以上、この帰郷が望まない結果を引き起こすかもしれないことは承知しているはずだ。
笑う彼女はそれでもなお、悪いことは起きないと信じきれているのだろうか。
考えすぎなのかもしれないけれど、私には彼女のように笑うこと

なんてあと何年経ってもできそうにない。

「そいえば聞いてなかったけど、レイの故郷って一体どんなところなんだい？　地図を見れば山の中ってことは分かるんだけど」

「えーっとですね、すいません。故郷がどういうところだったかあんまり覚えてないんです」

というよりレイは私が言っておいたことを知っているだけで、故郷について自分では思い出せていない。

あらかじめ場所を教えておいたから移動に不自由はないはずだが、美鈴さんの言ったような質問に答えることはできないだろう。

「じゃあ行ってからのお楽しみってことだね」

「なにか楽しめるようなところがあればいいんですけど」

「なかったら探すまでさ。面白いものがまったくないところなんてそうそうないものさ」

「最悪少年をずっと見ていれば問題ないしね」

「俺はそんなのごめんだからな。なにもなかったら恨むぞ！」

「あんたはそんな大人気ないことを言ってるんじゃないよ。何もなかったら寝てればいいじゃないか」

「寝てろって、おまえなぁ……！」

相変わらず美鈴さんは大道に容赦がない。さすがの私でもまるき

り運転手にしてしまうのは可哀想な気がするというのに。
苦笑をしながら何気なく視線を上げるとこちらを見ているレイとばっちり目が合った。
あれ、何でレイはじっとこちらを見ているのだろう。
私が首を傾げるとレイは視線を大道のほうにやってから、再び私の方に目を向けた。そしてすまなさそうな顔。
ちょ、ちょっと待つんだレイ。君は私を売るつもりなのか。そりゃ確かに大道相手には有効な策だということは、以前本を返してもらいに行ったときに証明されてるよ。でもそれはあまりにひどいじゃないか。
もし君がそんなことをするようなら、こちらにだって考えがある。動物を愛護することを目的にした団体の人に直接喋ってでも訴えてやるから覚悟しておくがいい！
「ん、少年。猫ちゃんが騒いでるみたいだけどなにかあったのかい？」
「おい、猫ちゃんをいじめるんじゃないぞ！」
「ああ、すいません。ちょっとからかいすぎちゃったみたいで」
からかっていたって？　あ、あまりに悪質だ。訴えてやる！
「でもレイだって大道だけにはいじめるなって言われたくないわよね。こいつ接触自体がいじめみたいなものだし」
「にゃん（異議なし）」

「あー……」

「おねえさんうまい。座布団一枚！」

「沙耶歌だったか、笑いすぎだ！　あとレイもフォローぐらいしやがれ！」

「えーっと」

大道も無茶なことを言う。ここでうまくフォローできるぐらいならレイは今頃敏腕弁護士として活躍しているよ。

でもまぁ私をあんなにからかったんだ。レイも少しぐらい困ったって自業自得というやつだろう。

「もういい！　お前ら全員さっさと寝ちまえ！」

「じゃあそうさせてもらおうかね。後は任せたよ」

「おじさん、おやすみー」

これでさっさと寝に入ってしまう女性陣はまったく逞しいというかなんと言うか。

でもこんな人たちだからこそ、一緒ならきっと何とかなってしまうんじゃないかというような安心感が沸いてくる。

まぁここで考えていても仕方ないし、私もそろそろ眠ることにしよう。

目が覚めればきっと目的地に着いているはずだ。

機嫌の悪そうな大道に頭を下げ、私はまどろむようにレイの膝の

上で眠りについた。

暗い夜道、車の中（後書き）

非常に遅れて申し訳ないです。
しかもグダグダ書き過ぎて、話が進んでないっていう……。

お次はＥＡＲＴＨさん
よろしくお願いします。

独りと一人とひとり

「レイ！レイっ！」

大きな何かが下からやってくる。
アレはなんだ…
心が不安に揺れ動く。
はやくレイをみつけてやらないと、同じように孤独さに消えてしまいそうになっているだろう。
そんなことを考えているうちにアレは迫ってくる。

「あ…あああぁぁぁ」

目を凝らしている隙にアレの正体がわかった。
一瞬すくんだ足を叱咤して逃げる。
私を飲み込もうとするそれは…純粋な闇。
黒ではなく、ただたんにすべてを染め上げて取り込んでいく。

「どこだ！レイ！レっ…」

尻尾の感覚がなくなったのがわかった。
間に合わない、そう思ったときにはもう闇に咀嚼されていた。

「に…」

視界がぼやける。

くぁ…と欠伸をして瞬きをした。
あぁ…なにかとてつもなく不安な夢を見ていた気がする。
ガタガタと寒くもないのに筋肉が震えている。
この震えは…

「お、猫ちゃんおきたか」
「なーう」

大道の声に反射的に返事をして、やっと我にかえる。
そうか…私は寝てて、夢を見て勝手に震えているのか。
たかが夢だ、内容も覚えていないほどのものならば気にすることはない。

「もうすぐつくらしいよ」

そう思ったが、頭上から降ってきたレイの声にも揺らぐ何かがあるように感じてしまった。

「美鈴も起こさなきゃな」
「あ、僕が」
「おう」

いや、今は今に集中しよう。
まずは美鈴さんを起こすところから…。

「美鈴さーん！美鈴さーん」
「…」
「美鈴～？美鈴～？起きろ！」
「…」

レイと大道が呼びかけたが美鈴さんはしっかり眠っている。
そこまで大きくないとはいえ、一つの図書館を取り仕切っているのだ、
いつも明るい彼女だがそれだけに無理をしたりして溜まっているものもあるのだろう。

「もうちょこっとだけ寝かせてやったらどうだ？」

クロさんが同じことを考えたのかそう言ったが、本当にもうすぐつくらしい、
大道もそうさせてはやりたいんだが…という顔をして、再度運転席から声かけをした。

「美鈴～？起きろ！」
「美鈴さーん！」

私も加勢して

「にゃーう、にぃー！」

と鳴いた。

「…」

しかし起きない美鈴さん。
見かねた大道が大きく酸素を吸い込んだ。

「美す…」
「うるさぁぁぁぁぁぁい！」
「ぐへっ！」

大道、お疲れ、お前のことは忘れないよ…
誰もがその時こう思った。
そして私は一瞬遅れて気がついた。
不安も恐怖もいつのまにかどこかへ行っていた。

――――――――――――――――――――ブロロロロロ

「疲れたぁ～」
「ふう…」
「大道さんお疲れ様です」
「やっとついたわ」
「なっふ」

車からぴょんと飛び降りてあたりを見回す。
あの頃と少しも変わっていないように見える入口。
だけど初めて見るような気持ちになるのは、私とレイがふたりぼっちじゃないからか。
孤独ではないからか。

「いいかレイ？」
「…」

美鈴さんが言った。
全員の視線がレイにそそがれる。
瞳に差し込む光を拒絶するかのように下を向いたレイ。

「…もう一度聞く」

クロさんがレイの肩に手を置く。
人間はこうすると手を置いたほうも置かれたほうも、双方が勇気をもらえるらしい。
私ではそんなことができないからただ見上げる。気持ちが伝わりあうように。
ジャリッ…そんな音がして誰かが息を吸い込む音がした。

「いいかい、レイ？」

さらっと風が吹き抜けて行った。

「はい」

はじまりの場所

村の入口。そう表現したが、厳密には入口があるわけでも、『ここからが村の敷地です』という線が引かれているわけでもない。

ただ、私には分かる。

空気が、違うから。

「……で、どこに向かえばいいんだい？」

あたりを見渡しながら、美鈴さんが声を出す。しかし、問いかけられたレイは申し訳なさそうな声を出した。

「分かりません……」

「あ、そうか」

レイは記憶を失っているのだ。どちらに行けばいいのかなんて、分かるはずがない。

ここから見えるのはせいぜい、平屋と畑くらいだ。

けれど、私は覚えているから。

君と出会ったあの日のことも。一緒に遊んだ場所も。

ちゃんと覚えているから。

「……にゃあ」

私は小さな声を出すと、レイの半歩前に出た。私の意図に気付い

たレイが、「とりあえずこっちに行ってみましょう」と皆に声をかける。私はレイの半歩前を、ゆっくりと歩き出した。

目的地は、決まっていた。

村に着いたら、最初に連れて行こうと思っていた場所。

私とレイが、初めて会った場所。

そこは私の寝床で、大道の家を更に劣化させたような掘立て小屋だった。

村の端にあるボロボロの小屋は、『黒猫』の私がこの村で暮らせる唯一の場所で、

「わあ、猫ちゃんだ！」

――彼が初めて小屋に来た時は、正直困惑した。追い出されると、思ったから。

けれど彼は、私の黒い毛など気にする風でもなく、私が人語を話せることを喜び、

「僕たち、友達になろう？」

こちらをまっすぐ見ながら、そう言った。

彼は毎日のように小屋に遊びに来ては、『その日の自分の名前』を私に報告した。それからよく、難しい本を読んでいた。――彼が自分の名前に凝り始め、読みにくい（かつ分かりにくい）名前をつけるようになったのは、そのせいかもしれない。

「そういえば、君にも名前がないね」
彼はある日、ふと思い出したようにそう言った。
「私には名前など、必要ないからな」
「……ふーん」
名前など、必要ない。
あの時は本当に、そう思っていたんだ。

彼が『あの娘』を連れて来た時もまた、私は困惑した。しかし、素直に喜んだ。彼を受け入れてくれる人間が、この村にもいたのだと。――いや。彼女は、私の存在までもを認めてくれた。
「この猫ちゃんにも、名前をつけよう」
少年に名前を与えた少女は、私の方を見て頬笑んだ。それから二人で、私の名前を考え始めた。クロという名前も候補に挙がったが、却下された覚えがある。そして、
「決めた！　猫ちゃん。君の名前は、×××。……どう？」
彼女に言われた名前。生まれて初めてもらった、名前。
「……いい、と、思う」

「思うって、自分の名前なのにー」

膨れっ面をする彼女を見て、少年は笑った。きっと照れてるんだよ、と彼女に説明をする。彼は私との付き合いが長いだけあって、私のことをよく知っていた。

「じゃあ決定！」

彼は私の方を見て、嬉しそうに笑った。そして、言った。

「君の名前は、×××。僕の名前は、」

それから半年後。村を追い出された少年は、

「僕の名前は……」

自分の名前も、村のことも、少女のことも、

「君の、名前……？」

私の名前も、忘れてしまった。

私は記憶を失った少年に向かって、笑いかけた。

「……私には、名前なんてないんだよ。必要、ないからね」

嘘だ。本当は、嬉しかったんだ。名前を貰えて、呼んで貰えて。
存在を認めて貰えた気がして、嬉しかった。

だから。
村に行くことを提案したのは。小屋に案内しようとしているのは、
私のエゴでしかない。
期待してるんだ。

彼がもう一度、私の名前を呼んでくれることを。

「――ひっ！」

後ろから小さな悲鳴が聞こえてきて、私は振り返った。背中の毛が逆立つのを自覚する。
私たちの背後にいたのは、村人だった。早朝なら村人には会わないだろうという、誤算。農作業のために外に出たらしい中年男性は、黒猫……つまり、私を見て腰を抜かしていた。

「む？　私の美貌に、腰が抜けたのか？」

こんな間抜けなことを言うのはもちろん紗耶歌だが、彼女も分かっているはずだ。
村人の反応の、意味を。

「お、お前ら……」

村人は私とレイの顔を交互に見比べ、それから紗耶歌たちに向か

って叫んだ。

「お前ら、『それ』から離れろ！　早く！　『それ』は、呪われて――」

村人はそこで言葉を切ると、自分の家へと逃げ帰った。

美鈴さんと大道が、村人からレイへと目をやる。レイは浅い呼吸を繰り返し、小刻みに身体を震わせていた。一瞬訪れる静寂。それを破ったのは、

「すまんな猫ちゃん。しかし、言わせてくれ」

紗耶歌だった。

「少年」

紗耶歌の声に、レイが振り返る。紗耶歌は、――微笑んでいた。

「君がどちらを選んでも、私たちは怒らない。『帰ること』を選んでも無駄足だったとは思わないし、『進むこと』を選んでも不快だとは思わない。絶対に。だから」

彼女は私の方を見て、……私にも、笑いかけた。

「私たちのことは気にせず、自分の進みたい道を行けばいい」

肌寒い風が、彼女の髪をかすかに揺らした。

はじまりの場所（後書き）

書きたいものを詰め込みました、うわの空です。

それではくぃかそ様、お願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6235w/

人見知りする碧（暫定）

2011年12月29日09時47分発行